

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほろり

[21-7]

N
7
8
4
9
S

【作者名】

はち味

【あらすじ】好みのタイプを訊かれたらい、俺は迷わず「うん」と答える。「ランデセルが似合つ女の子かな」。キングオブロリ「」の主人公 九条高明にはとある秘密があつた。変態度99.9?、恋愛度??????の青春ラブコメ。物語の最後には思わず……ほろり?

ストライクゾーンはひやょつ下

誰かに好みのタイプを訊かれたら、俺 九条高明は迷わず「う
答える。

「ランドセルが似合う女の子かな」

あつ、ここつロココンだな、と思つことなれ、判断が早すぎる。

現在の俺は一四歳、明日から中学三年生、今年の夏に一五歳になる。

さて、じじでちゅびっと考えてもみよう。

ランドセルを背負う女の子の年齢は、七歳から一一歳の間だ。俺の年齢と比較してみて、それほど差があるかな？ どうかな？

一般的に考えても、まだ許容できる誤差の範疇ではなかろうか。だから多少は大目に見てくださいよ。ね？

まあね。

さすがに二十歳を超えてなお小学生が好きな奴はまぎれもなくロリコンだけれども、俺はそんな大人にはりたくないし、なるつもりもない。

ともあれ。

俺は年下が好きだ。

……いや、少し違うな。言い換えよう。

年上でなければいいのだ。

ある奴に言わせると、「ストライクゾーンがせまいのはもつたいねえぞ」との「じりじり。うるせえほつとけ」と思つ。

たしかに現時点では、自分の好みのストライクゾーンはせまい。

しかし、どうだらう。ここで逆転の発想を提示して進ぜよつ。

齢を重ねるにつれてストライクゾーンがどんどん広がっていくのだと考えれば、年下好きという性癖は本当にもつたいないことなのだろうか。

いいや、そうじやない。

もうおわかりだらう。年下好きであることの特典は、毎年楽しみが増えていくことにある。逆に、年上好きの奴はどうなるのか。言うまでもなく、毎年楽しみが減つていいくのである。

どちらが勝ち組か。気づいた者だけが、人生を謳歌できるのだ。

……なんてな。

まあ正直に言つと、これは後づけの言い訳に過ぎない。気がつけば年下が好きで、年上が苦手になつていた。

特に、暴力的な年上の女は大の苦手だ。

俺は昔（と言つても、五、六年くらい前）から、母や姉の暴虐に耐えながら生きてきた。だからなのだろう、年上の女が視界に入るだけで反射的にびびってしまう。

ああ、ちなみに、年上の女と言つても、祖母にはとても優しくされたから、年老いた女性におびえることはない。かと言つて、ストライクゾーンには入らない。言つまでもなく。一応ね。

もう一度言おう。

俺は年下の女の子が好きだ。大好きだ。

だから、目の前に可憐な少女が現れたらつい見惚れてしまうことがある。湯気の立ち上るお茶を一気に飲み干したときのような感覚が、胸にじわりと広がる。

それは。

駄菓子屋の傍らにある自販機で、緑茶を購入するためにボタンを押そうとしたときのことだった。

月並みな表現で申し訳ないが、俺は本氣でこう感じた。

そこに天使が舞い降りたのかと。

天使 それは、小学生の女の子。ランドセルは背負っていないが、ぱっと見でわかる『ランドセル世代』だ。

彼女は店先に向かって駆けてくるや、クーラーボックスの引き戸

を開け、その中に身を乗り出して商品を漁り始めた。白いスカートから伸びた足がバタバタと動く。「うんしょ、うんしょ」と言ひながら、必死にアイスを選んでいるらしい。

さて。

俺の脳内にいる審判（52歳／男性／バツイチ）が拳を振り回しながら「ストライク！」と絶叫したんだが、汝はどう思つ。この光景の風情みたいなものが、分かる奴にはわかるだろ？？

そう、それはまるで眼窓にガラスの粒子が入り込んだかのようで、目の前に広がる世界が輝いて見えるのだ。たとえば少女漫画によくある、白馬の王子様的なキャラクターが登場するときの演出に似ていって

ちやりん、と小銭の鳴る音がして、俺は我に返つた。自販機入れたお金が自動的に返却されたらしい。眼福タイムに漫り過ぎて、すっかりお茶を買ひごとを忘れていた。

「……いかんいかん

俺は呟きながら、買ひなおすこととした。

がこん。

自販機が荒々しく緑茶を産み落とす。俺は腰を曲げ、ペットボトルを手に取つた。

「あの、これください。」

駄菓子屋の中から元気いっぱいの甲高い声が聞こえてきた。いつの間にか少女は店に入っていたらしい。

「支払いはカードで！」

「ふつー！」

思わず買ったばかりのお茶を地面に落としてしまった。まだキヤップを開けていなかつたから被害はなかつたが。いや、そんなことよりも……。

おいおい、カードって。ビリの世間知らずのお嬢なのだろうか。

そもそもこんな田舎の駄菓子屋にカードを読み取る機械はないだろうし、そもそも未成年がカードなんて使えるものなのかな。親の承諾があつたらしいのかな。カードの知識がないから、憶測でしか物が言えないけれど。

「そんなもん使えるか！」

老婆のしわがれた怒鳴り声が響く。その後に、「え？ あれ？ そんなはずは……」という戸惑いの声が漏れてくる。まあ、ババアの反応はさもありなんだな。シツコミ所がありすぎる。

しかし。

可憐な少女の失態に怒声を浴びせるのは法外の所業だ。何があるとも、少女を傷つけることは俺が許さん。俺が勝手に決めた法律では、俺よりも年下の女性が全面的に優遇される決まりになつてゐる。

したがいまする」。

今からババアには天国への近道を教えてやるつと申つわけや。あるいは、地獄への道案内をしてやるつとかしぃ。少女のお望みとあらば、俺はいつでもキラーマシーンとなるよ。

「どうひーー。」

俺は正義の味方よろしくダサイかけ声とともに、勢いよく駄菓子屋に乗り込んだ。

「おじバアせんやー。」

「……はあ。また妙なのが現れやがつた」

駄菓子屋の店主である老婆が、露骨にため息をついて俺を迎えてくれた。

「何の用じやい、クソガキ」

これが数百年と接客業をしてきたプロフェッショナルの正しき姿であるからして、こちもそれ相応の対応をさせでもう。

「クソババア、その少女が持つてゐるカード、あなたのしわでスキンできんのか?」

「できるかー。」

老婆はしわだらけの顔をむりにしわくわにして憤る。

「つーか、お前マジで出会いがしりそれは失礼！」

「そんなにたくさんしわがあるんだから、黒ひげ危機一発みたいな感じでひとつひとつじわにカードをスライドをせていけばひょっとして……」

「ひょっとするかー ロンペコーターおばあちゃんでもできるか、そんなもんー！」

憤慨した老婆の顔が、ついにはボツ原稿のような有様になる。やべつ、怒らせすぎたか。

「……とこつか、ウチの店はカードを読むスキャナーがある

「え、マジで？ それ必要？」

スキヤナーに投資できるほど利益出でないだろ、この駄菓子屋。

と思ひきや、店内を見渡してみると、意外に設備投資していることがわかる。メタリックな外観のアイスクリーム製造機も珍の奥に数台並んでいる。

その内潰れるな、きっと。投資に気合入れ過ぎだ。

「俺、クレジットカードとかに詳しくないけどや、やつに「カードつて子どもが使っちゃダメなの？」

「……はん」

鼻で笑う老婆。

「やついつ次元の話じゃないわ。その子の持ってるカードを見てみろ」

「え？」

俺は老婆の指さした先にいる少女、その手元を覗き込んで

「……やついつとか」

老婆が声を張り上げたわけを理解した。少女の持ったカードの表面に、魔法少女のイラストが描かれていたからだ。世界広しと言えども、そんなお子様向けなクレジットカードはこの世に存在しないはずだ。

「お父さんもお母さんも、カードでお買い物してたのに……」

少女はくちびるを尖らせてつぶやく。

なるほど。両親が買い物していた光景を見よう見まねでやつてみたのだろう。しゃせん子どものことだ。そういう誤解もありえなくもない。

「やついつわけじゃ、お嬢ちゃん」

老婆は少女に向かつて優しく声で言った。

「そのカードじゃ買い物はできんよ。ちやんとお金を持つてこないと」

「……やつですか」

少女はつづめて、すつかり意氣消沈している。とても眞の毒である。

「また来ます」

そう言つて頭を上げた後、じょとじょと口を出で行つとする少女。

その悲しみに満ちた背中を田で追つていた俺は、いきなり脇を突かれて「あつー」と声を上げてしまった。

とつやに脇を見やると、老婆のしなびた指が触れていた。

「何すんだ、このハイテクババア！ ウイルスプログラムをインストールすんだー！」

「警察にお前をバスターしてもらうから構わんよ。それより、いいのかい？ あの子をこのまま行かせて」

「……つむせえな」

俺は横田で老婆を元へりだ。

「じつせんを止めたり』のロコ「ンぬ』とか『だだりへ..」

「あほつか。妙な心配しあつてから……」

老婆はやれやれとこう風に肩をすべめた。

「わしがそんなことは言わん。早う追いかけて、アイスでもおいかつやれ。そして、店の売り上げに貢献しろ」

「はいはい、大した商売上手だ」と

俺は言ひながら小走りで出入り口に向かつた。店を出ると、まだ、すぐ近くに少女はたたずんでいた。好都合だ。

「あの」「はいっー」

俺が声をかけると、少女はまるで予期していたかのように高速でぐるりと振り返った。

「なんでしょう、お兄さんー。」

「いや、あの……」

どこか白々しい拳動に思わずたじろいでしまったが、まあかわいいから許せつ。俺は頭に浮かぶ疑念を振り払い、言葉を続けた。

「君さ、お金持つてないの?」

「一円も持つてこません。もし一円あつたら、アイスが買えたんですけど」

聞いてもいらないのにアイスの話題を振つてくるといつも白々しいことこの上ない。だが、それもまた子どもの愛嬌である。何を企んでこよつとも、どうしても憎めない。

俺はひざに両手を当てる、少女の皿線に自分の皿線を合わせた。

「お兄さんが代わりに、アイス買つてあげよつか？」

「ええへ、じんなかんた」「

わう言ひかけて、はうとしたままで口をふるぐ少女。

「あれ？ じんな簡単、つてどいひいう意味かな？」

「いえ、何でもないです。それよりいいんですか？ わたし、何もしてないのにアイスを買つてもううて」

「気になしくていいよ。お兄さんはサンタと同じで、子供もプレゼントを贈るのが好きなんだ」「

「へえーー、お兄さんはすうじい人なんですねー。」

少女にきらきらと輝いた目を向けられると、何だか照れる。後頭部がかゆくなる。ほりほりしたい。ほりほり。

「あはは、さうでもないけどね。じゃあ、わつきの店に戻ろうか？」

「はいー。」

それから店に戻るや、少女と老婆が皿を合わせてわずかに口角を持ち上げた気がしたんだが、老婆はともかく、まさか天使に限つて姦計をめぐらせるわけがない。ないない。マジでありえない。

俺は頭を振つて、再び猜疑の念をリセットしてから、少女に訊ね

た。

「何がほしいの？」

「これです！ バニラ、チョコのミックスで！ 『ひとつあんです！』

少女が小さな指を向けた先には、アイスクリーム製造機があった。

「まいどあり！ ……」のロリコンめ

老婆が線の多い手の平を俺に向かた。

ミックスは一個、三百円也。

ならば、さつきの百円のくだりは何だったのだろうか。なんて疑問の真相は 露骨にアイコンタクトを交わしている、田の前の二人にしかわからないみたいだ。

優男

だまされちゃいない。だまされちゃいない。だまされちゃいない。

俺は回復の呪文を唱えながら、少女と一緒に店を出た。

少女はとことこ歩きながら、自分の顔くらいの高さのあるアイスを無邪氣にため回している。

「……まあ、だまされててもいいか」

俺は本心からそういう思つてつぶやいた。そのなのだ。天使の喜ぶ姿を見られただけでも僥倖と考えよ。三日三晩、安心もんだ。

すると、少女は突然ぴたりと足を止めた。

「お兄さん、今日はありがとうございました！」

快活に感謝の言葉を告げ、ペーパーと一礼した。そのはずみでノーンに乗つかったアイスがぐらつと傾き、一瞬落ちそうになつたが、すぐに元の角度に戻つた。

……ふつ、ひやりやせる。せつかく買つたものなのに、落とされてしまつたらシヨックでくわむわ。三日三晩、全身斑点だらけの病状に見舞われて寝込むわ。

「いやいや、どうしたしまして。それじゃあ、俺はもう帰るよ」

「え……もつひとつですか？」

なぜか名残惜しそうな表情を浮かべる少女。そんな顔を見せられると、ついついこの場にとどまってしまいそうになるが、あいにく今日は外せない用があるのだ。もし無断で外したら、どんな目に遭わされるか、想像もしたくない。

「うん。どうしても外せない用事があるんだ」

「そうですか……」

「またいつか会えるといいね。ばいば」「おい九条！？」

俺が別れの挨拶を告げている途中、突如、鼓膜をつぶさくような大きな声が背後から聞こえた。

「あやつー。」

田を見開いて驚く少女。その刹那、彼女の手がびくりと動き、アイスが大きく揺れてそのまま地面に引き寄せられるかのように落下した。

べけや。

水っぽい音を立てて、コンクリートの上に貼りつゝアイス。それはみるみる溶けて、広がっていく。

少女の顔を見ると、田と口を大きく開いたまま固まっていた。しかしやがてその顔も、アイスと同じくみるみる歪み

「……ぐすつ、ぐすつ」

ついにほ、目から大粒の涙をこぼして泣き出しちゃった。

「……あ、あれ、九条？ ひょっとして、おれ、マズイことしたかな？ いや、まさかこんなことになるとは、全然知らなかつたし、何の悪意もなかつたんだ。それだけは信じてくれな、な？ な？ 謝るから、金なら出すから、ごめん九条。マジめん。許してくれ！」

動搖に満ち満ちた声が、俺の後ろからマシンガンのようにつづり放たれている。だが、何ひとつ鼓膜に当たんねえんだよな。

九条高明 今までの人生で最高潮の怒りを感じておりますゆえに。

俺が今にもはじけそうな感情を抑えながら振り向くと、田の前の男は「ひいっ！」と情けない声を漏らした。

「ぐ、九条さんのそんな顔を見たのは初めてなんだぞささか怒りすぎではないのか般若よりもキレてらっしゃる」「黙れよ、中瀬古」「ひつ……！」

俺は、滝のような汗をかいている茶髪男 中瀬古の弁当を止めた。

「……で制裁を加えるつもりはねえ。先に”例”の駐車場に行って、そこ待ってる。いいな？」

「……はー」

中瀬古は声帯を小刻みに震わせながら答えて、そそくせとその場から消えた。

「ぐすり、お兄さん……」

声と同時に、くいくいと服の裾を引っ張られる感触がして、俺は正気に戻った。

「……せつかく買つてもらつたアイス、落としてごめんなさい」

鼻声で謝る少女。鼻を真つ赤にしておえつを漏らす、そんないじらしい姿を見ると、ますます中瀬古に対する怒りが胸にこみ上がる。が、ここはどりどりの感情を抑制して、俺は無理やり笑顔を取り繕つた。

「いいよいよ。落としたのは君のせいじゃないからや」

俺はポケットから財布を取り出して、一番大きな硬貨をつまむ。

「ほら、これでまた買つてきなよ」

「でも……」

「大丈夫だよ」

言ひながら、少女の手に五百円玉を握りせる。

「お兄さん、やつきの男からすべてを奪つてぐるからね」

「……はい？」

少女と別れて、俺は”例”の駐車場に向かう ことなく帰宅した。

そうそう。超重大な用事があつたのだ。危ない危ない、忘れるところだつた。中瀬古には別日に鉄拳制裁を下そうと思つ。憶えていたら。

「ただいま」

玄関のドアを開けると、姉が腕を組んで立つていた。

姉は純粹な日本人にもかかわらず、ロングの金髪（染めている）だ。手足はすらりと長く、背後から見ると、まるで外国人のよう。ただし顔立ちはやはり日本人のそれ。身内を評価するのはいささか氣恥ずかしいものがあるけど、けつこう美人な姉である。俺とは似ても似つかない。

姉は、にこりと笑つて曰く、

「はい、一分遅刻うー」

とのことらしい。

遅刻と言われても、事前に集合時刻を取り決めた記憶はない。昨日、姉本人から「明日は昼過ぎには家にいる」とのご達しがあつただけだ。

現時刻は腕時計の針を見るに午後一時十二分。どうでしょ。姉が『勝手に』決めた集合時刻に間に合わなかつたとして、俺は悪いことをしたのだろうか。

いや、何も悪くない。もう一度言つ。何も悪くない。

「『めんなさい』」

しかし、何も悪くなくとも、姉の気分を損ねるようなことがあれば、俺は地に額をつけなければならぬのだ。

なんでつて？ いや、そういうことなんだからじょうがないでしょ、としか答えられない。

察してください。死にたくないんです。もう一度言つ。死にたくないんです。

「一分も遅れておいて、謝つて済むはずがないよねー？ 中学生にもなつてまだママに拭いてもらつてお尻、こいつに向けなさい」

「はい」

俺は言われるがまま無駄のない動作で靴を脱いで廊下に上がり、いつもウォシュレットで一分以上水浴びをせているお尻を姉に向けた。

ちなみに、母にお尻を拭かれたのは、七年以上前の話だ。

俺の名譽に侵入してくる悪意あるプログラムは逐次、徹底的に潰

していく。

「そんじゃ、ケーツキック……！」

「……？」

どかっ。

俺は前傾姿勢のまま、顔面から壁にぶつかった。お尻に衝撃がはしつた瞬間、目前に壁があつた。声を出す暇もなかつた。

痛い。痛すぎる。鼻が潰れたかもしれない。

「なるほど、思いつきりお尻を蹴られると、人はこういう感じでぶつ飛ぶのね。これで動きのある良い漫画が描けそうだわ」

俺の悲劇的状況に反して、やけにのんきな姉の声。日本のアベレージとされている家庭では、かような一連の暴力的行為はまず起これ得ないだろ？

しかし、我が家ではこれが日常なのだ。俺は物心がついたときから、モルモットみたく扱われてきた。

したがつて、じたなのは当たり前のことだから俺は別に怒つてなどいない。

そう、鼻がずきずきと痛むが、別に怒つてなどいない。再三に怒るが、別に怒つてなどいない。

「何よ、額に血管の三叉路を浮かべて。文句があるなら、かかつて

きなさいな。肉体言語を使って徹底的に議論しまじゅつ

「……いや、怒つてないよ」

議論と言つても、拳で語り合ひのまつぱりめんだ。

万に一つも勝ち田がないからな。女性と言えども武道経験者は伊達じやないのだ。

「あ、そう。相変わらずのフヌケね、中二にもなって。そんなことだから」「

見下すように、言葉を吐き捨てる姉。

「まだホワイトチンチンなのよ。その歳でそれだと、ブラックチンチソよりもたちが悪いわ」

「……おこない、そいつは聞き捨てならんなあ、姉さ」

股間にまつわるHトセトラは、男の尊厳にかかる部分だ。言わば逆鱗なんだよねえ、そこは。たとえ姉さんがいくら敬うべき存在、力づくでは絶対に勝てない存在だとしても、この件に関しては引いてやられねえ。

「ふうん。それで、聞き捨てならんとしたら、こいつたい何なの?」

「じばりへ時間くれ。うしたまづあ……」

「あやか油性ペンでペイントするんじやないよね? もしそんなことしたら、その手の商品を作ってる業者の逆鱗に触れて、最悪の場

合浦をれるわよ。ひなみにその業界では怖い人のことを『修正ペン』
と呼つらじいわよ

いや、そんな業界用語も慣例もあるわけねえだろ。

「ああ。でも、鉛筆およびシャーペンは許可するわ。遠慮なくペイ
ントしてちょうだい」

「手加減を誤つたら、股間がずたずたの血まみれになるけどな」

想像するだけで股間がきゅうとなる。これだから姉は恐ろしい。
口論でも勝てる気がしない。

「ま、あんたの股間のことはなんかビリでもいい。男の乳首へりこ
びつでもいいの」

まるで意味が分からぬ。たしかに男の乳首はビリでもこことい
うか、存在意義が解せないが。

あれ？

ところとは、俺の股間の存在意義も つておこない。まさか
一生童貞なんてことはあるまい。あははつ、まさかね。

「ともかく」

姉は言こながら、金色に輝く長い髪を左手で振りはり。

「せつせつと私の部屋に行つて作業を始めるわよ。今回『はなみ』絶対に
漫画家として『レビュー』してやるんだからー。」

ロリコン vs 熟女好き

姉は「漫画家になりたい」という志を持つている。それは立派なことだ。

経済的に自立すれば一人暮らしができるから、なんて高校一年生女子真っ盛りな動機ではあるものの、大きな夢を実現させようと頑張っている姉は、傍から見ていて尊敬する。

姉には漫画家としてデビューし、成功を掴み取つてほしいと思つ。だが同時に、成功するための手段として俺を巻き込まないでほしいとも思つ。

応援はするが、手伝いはしない。俺はそのくらいのスタンスでいたかった。

しかし、姉はそれを許さなかつた。

『少年向けの雑誌に投稿してるんだから、読者にはあんたが適役でしょう』

『少くとも、このことじで、このことじの連口、素人ながらアドバイザーをさせられてくる。

「……にしても、何だかなあ」

俺は、羽虫が集つロリコンビニの前でたたずみ、そうひとづいた。

アドバイザーの仕務だけならまだよかつたのだ。漫画を読むのは

好きだから、いくら読んでも苦にならない。ところがそれ以外にも、やれ人が殴られたときのアクションを見たいから実験台になれるの、やれ意見はしてもいいけど私のモチベーションを下げる」とは言つただの、難しい注文をつけられるのだ。

さらじは、

『ちょっと小腹が空いたからパンを買つてしまつていいじゃない？』

と、夜の十時に命令される始末。あの姉は、俺のことを便利な雑用係かそれに近い何かだと思っているに違いない。

まあ、うして素直に従つている俺も俺なんだけどな。でも、口答えをしようものなら武術を全力で行使しやがるから、仕方がないじゃない。しょせん弱者は強者の言いなりになるしかないのだ。

「……はあ」

ため息をつくと、両手に持つたペーパーホール袋の重みがいつそう増した。何をやつてるんだろくな、俺。

つんつん。

薄茶色の羽ではばたく蟻が俺の額に軽く触れて、夜空へと消えていく。……さて、明日から始業式だし、さつさと帰つて風呂に入つて早いうちに寝るか。

ぬかるみを歩くよつた足取りで、数歩進んだときだつた。

「あつ、中瀬古先輩！ あれって！」 「ああつ！ 九条じゃねーか
つ！ こんなところに！」

十数メートル離れた場所に、二つの人影が見えた。声から察するに、中瀬古とその後輩か。そういうえば中瀬古のことは、毎に起つた事件の後、完全に失念していた。

もしかしてずっと”例”の場所で待つてたのかな。だとすると、ざまあみるだな。

「おいこら、九条！」

人影二つはダッシュでこちらにやってきた。一人、声を荒げている男は、やはり中瀬古だった。もう一人は知らぬ顔だ。

「お前、何で来なかつたんだよ！ 待ちぼうけくらつたじやねーか
！」

「は？」『待つてる』とは言つたけど、『後で俺も行く』とは言つてねーだろ？

とつさに思い出した。たしか中瀬古には待たせておいただけだった。だから俺は何も謝るようなことはしていない。

「つまりはそういうことだ

「そういうことじやねーよ！」

中瀬古は額に血管を浮かべて激怒した。

「「」ちとら後輩たちに集合かけてずっと待つてたのによー。 おかげで赤つ恥じやねーか！ 僕の威儀をどうしてくれるー。」

「後輩を集めたのはお前の意思だろ。俺は命令してねーよ

「何でもかんでも俺のせいにするな。

「それで、何だ。最後まで残つたのは、その奴だけか

そここの奴とは、中瀬古の隣にいる坊主頭の少年のことだ。よーく観察してみると、眉毛がない。ここのヤンキーでも珍しくらいに氣合が入つてゐるなあ。頭に脳みそは入つてなさそうだけど。

俺は少年に向かつて挨拶をした。

「はじめまして、九条です」

「あつ、どうも。僕は古館です。」

「あのや、こきなりでなんだけど。古館くん。君、汗かいたら、眼球が痛いでしょ？」

「出会いがしらにやんなリアルな質問？！」

見た目とは裏腹に、少年 古館とやらがとても礼儀の正しい好青年だったので、ついついテンションが上がり、こんな質問をしてしまつた俺を誰が責めよう。

古館は、うわああああ、と顔を真つ赤にして悶絶を始めた。

こきなり急所を突いてしまい、彼には悪いことをしたなと思つ。しかし訊ねずにはいられなかつたのだ。涙なしでは語れないであろう、彼の現実を。

なんて、羞恥に悶え苦しむ古館をからかつて楽しんでいると、中瀬古にいきなり胸倉をつかまれた。

「俺の後輩からかうござねーよ。ロリコン野郎め」

「ああん？ お前も人のことを言える性癖か？」

俺もとつたに中瀬古の胸倉をつかみ返して、いつに返した。

「熟女好きの異常性癖者が偉そつて」

「待てよ九条。熟女好きは犯罪じゃねーけどよお、ロリコンは犯罪だろ？ その違いは大きいぜ？ ひよこクラブ(愛読者め...)」

「行為に及ばなきや犯罪じやねーぞ。それよりもあえて腐りかけを愛好する人間の思考回路が怖いんだけどな。お前らみたいなのが多少消費期限が切れても大丈夫とか言って、食品偽造すんだよ！」

「うるせえな」の野郎。お子様がランチの変態がよおー。」

「お前なんか授業参観の最中、母親たちの振りまくエロスに股間が自ら主張して、作文読むために起立できなかつた変態小学生だつたじゃねーか！」

「やんのかー?」「ああんー?」

「ち、ちょっとお一人ともこんな感じでケンカするのは……」

「アーニー、アーニー！」

古館が俺と中瀬古の間に割つて入るうとしたが、つい勢い余つて一喝してしまつた。中瀬古と一緒に。

「...」

古館は泣きそつた顔で口をぱくぱくさせた後、絞り出しうる「すみません」と言った。冷静になつて考えてみたら、ここには全然悪くないのにな。

そうだ。

悪いのは全部、中瀬古だ。だんだん思い出してきた。中瀬古があのわいらしい少女を泣せたのだ。だんだん腹が立つてきた。中瀬古にぶち切れた一分のせいで集合時間に遅刻したのだ。おかげで俺は姉からケツキックの制裁を受けた。そのはずみでお尻が二つに割れた。穴も開いてしまった。あまつさえ臭い物体が出るようにもなつた。それもこれも。すべて。中瀬古の。中瀬古のせいで、俺は……俺はっ！

「何だ九条、その目つきは」

中瀬古の表情がしだいに険しくなる。

「九条よお、お前、マジで俺とやりあおうってのか？」

「いいや。最近は理不尽な目に遭ひ」とがめられてゐるが、かくいふべき

シャクシャしてたんだよ

「ふつ、やうか」

中瀬古は不敵な笑みを浮かべつつ、

「中瀬古太一、十四歳。逃げも隠れもする氣はねえ。ケンカならいつでも受け立つぜ」

なんて、そんなかっこいいセリフで決められちやあ、こちりとしても、いつ言いつしかねえよな。

「なら、今からやりつけ。"例"の駐車場で。な?」

予感

数十分後、”例”の駐車場に俺たちはいた。

先日潰れたパチンコ屋の裏に位置する駐車場のことを、俺と中瀬古は『例の駐車場』と呼んでいる。

周囲は真っ暗。空が雲に覆われているので月明かりもなく、人里離れたところなので近くに人工的な光もない。可視範囲はおよそ一メートル。自分の目からそれ以上離れた物体は何も見えない。

視覚が制限されると、聴覚が異様に研ぎ澄まされる。風の音、虫の鳴き声、遠くで車の移動する音が、鮮明に耳に届いてくる。

近くでこんな声も聞こえる。

「ギブギブギブギブギブギブギブギブギブギブギブギブ！」

それは奇妙な虫が鳴いている声ではない。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！」

それは苦痛に満ちた人の声だ。

「マジでごめん！ 謝る！ 俺が悪かった！ 九条！」

それは謝りながら俺の名を呼んでいた。

「どうせなら俺も古館と同じく締め落としてくれよ… なあ頼むか

それはマジなお願いをしていた。

「アキレス腱固めだけはマジで勘弁してくれ！俺のアキレス！アキレスだけは無事に返してくれ！」

それはアキレスの無事を願っていた。

「太一・アキレス・中瀬古！ちくしょう、アキレスめ！勝手に俺のかかとの付近に寄生しやがって！」

それは突然アキレスにキレ始めた。

「お前を養子にもらつた理由は激痛を味わうためじゃたかったんだよ！この役立たずが！」

それはアキレスに罵声を浴びさせていた。

……おっと、状況説明が遅れた。

今、俺は中瀬古のアキレス腱をがつちりとホールドしている。アキレス腱固めの状態である。これは寝技アリの格闘技でよく見られるポピュラーな関節技だ。

この技術は、姉の実験道具になつていていた時代に培つたもの。じやなくて、それではあまりにもカッコ悪いので改めて言い直すと、姉との模擬戦闘で培つたサブミッションである。

これで、どうだろ？

関節技の効果は、中瀬古自身の実況で十分に説明がつくと思う。ギリシア神話に登場する人物『アキレウス』にハッタリしてしまつくらい痛いのだ。

ところで俺たちの様子を傍から見て、これがケンカの最中だとは誰も予想だにしないだろう。ケンカと言えば、顔面をド派手に殴り合つ光景を想像するのが一般的だと思う。

だけど、それは俺の理想とする闘い方じやない。実際、素手で人の顔を殴ると拳が痛いしさ、殴られて口の中が切れるとき鉄をずっと舐めているような感じになるしさ。現実問題、殴り合いはお互いにとつて損害が多いんだよね。

あと、俺は尾を引くケンカがしたくないのだ。「頬の傷が痛むたびにあいつの顔を思い出すぜ」みたいな後腐れはなしにしたい。

だからこその関節技である。

極まれば明確に勝敗がわかるし、実力の差もわかる。打撃とは違つて、相手へのダメージもコントロールできるから、誤つて重傷を負わせることもない。

極めて理性的かつ、クールなケンカ。

それが俺の理想なのだ。いかがだろうか？

「痛い痛い痛い痛い！ なんで力強めてんだよ？！」

「ストレス解消かな？」

「なるほど、アキレスの兄弟みたいなもんだなそいつは！　お前に何かあつたのか！？　話だけなら聞くぜ！」

中瀬古は痛みに苦悶の表情を浮かべながらも、積極的に俺から言葉を引き出そうとしている。わけのわからない」とを口走っているが、その姿勢だけは大した男である。

「なあ、中瀬古」

「何だよ？」

「年上の女つてうぜえよな……」

「ああ！？　舐めてんのか！」のロココノ！　それだけは言つちや痛い痛い痛い痛い！　そうだな！　俺も年上の女は全員嫌いだよ！　うぜえよ！」

ちよつと痛みを「えればすぐ」にこれだ。こんな男が俺の通う中学の番長をはつてているのだから、事実は小説よりも奇なりだ。こいつを慕つている後輩が不憫でならない。

「だろ？　あこつらは年下の男なんか、男の乳首くらいにしか思つてねえんだよ……」

「え、どうこいつ意味それ？　あいつら変態なの？」

中瀬古は混乱している。姉が変態である」とは否認しない。

「まあでも、そうだな。年上の男が好きな女はあこyna。逆に、年

下好きは度を越せば変態だ

「たしかにシヨタコンは変態だな……」

中瀬古の言つことは正論だ。

「わかつてゐるじゃねえか。ついでに言つと、ロリコンも同じだぜ。年下好きは度を越せば変態なん痛い痛い痛い！」

「お前、反省してねえだろ。歩けなくするぞ」「おい」

それは不意のことだった。毅然とした女性の声が俺の語尾についたのだ。さらに続けて、

「お前ら未成年が暗闇で何してんだ？ ホモか？」

と、それはまるで男のような口調なのだが、まぎれもなく女性の声だった。ハスキーデ、若干巻き舌な呂律が酔っぱらいのそれに似ていて

ふつと風が吹いた。全身が冷たい空気の渦に包まれる。

その刹那、中瀬古の呆けた顔が月明かりに照らされた。中瀬古は俺の背後に目の焦点を当てながら、

「……すげえ美人だ」

とつぶやいた。

俺はぎくりとした。熟女好き男子の美的観点から査定された美人

とこのものを想像してみると、嫌な予感しかしない。

俺がおそれおそれ振り返りつつした そのとき、「今だー」 と
中瀬古が動いた。

中瀬古は俺の腕から片足を引き離して立ち上がるや、

「美人なお姉さん助けてくださいー！ 僕と、そこには寝転がつてて
後輩が、こいつにいじめられてたんですね！」

と大声で虚言を振りまきながら、素早い動きで俺の背後に回った。
ちくしょー！ 最悪だー！ 形勢が逆転しちまつたー！

中瀬古は、俺が年上の女に弱いことを知っている。俺が怖そつな
年上の女を面前にするだけで足が震え、まともに田も合わせられな
くなる」とも、もじろん。

実際に今も、何もできず立ち尽くしていく

「つるせえ黙れ、てめえー！」

「あやつー！」

背後で、人がコンクリートを転がるような音が聞こえた。

……あれ？ 一体、全体、どうなってんの？

「男なら自分でやり返せよー！ 意地でも女に頼るんじゃねえよ、ク
ズがー！」

「ひこつーーー？」

中瀬古の発する情けない声と同様、正直俺も混乱していた。背中の方向から聞こえてくるのはたしかに女性の声なのだが、なぜか頑固親父のような言葉が飛び出してくれる。

改めて言おう。一体、全体、どうなつてんの？ わけがわからなすぎるで怖いよ……。

「クズはせつとじつつかいつちまえ！ そこので寝てる雑魚も連れてな！ 棒立ちしてん奴は、私が成敗してやるからよー！」

「は、はははー！ 失礼します！」

中瀬古は俺の横を駆け抜け古館を背負い、「ひこつやべえぞ」というアイコンタクトを俺に寄こしてそそくかと逃げて行つた。

……いや、アイコンタクトされなくともわかってるよ。わかつていても、動けねえんだよ。動いたら尿道のコントロールが不能になるんだよ。

走り去る足音が遠ざかって、代わりに静寂が訪れた。

「わい」

黒い影が俺のすぐそばを横切つた。

「お前らみた的な奴のせいだ」「いらの治安が悪くなると、明日からの私の仕事に支障が出るんだよ。わかつてんのか、ああ？」

黒髪のロングヘア。

「それによお、せつかくケンカすんなら立ち技で勝負しろよ。見てて胸糞悪いわ。寝技なんか今どきオカマでもしねえぞ」

切れ長の大きな目。

「男同士なら顔にキズ作つてなんぼだろ？ これだから近頃のガキは軟弱で嫌いなんだよ。もつと骨のあるやつはいねえのか」

整つた顔立ち。

「私たちの頃はかなり気合入つてたもんだけどよ。家でゲームするのもいいけど、中防になつたらまずケンカだろ？ なあ？」

月明かりを反射する真つ白の肌。

「おいらお前！ 聞いてんのか……つて、あれ？」

年下好きの俺ですら、一生記憶に保存したくなるほどの美人。

「ひょっとして、お前……泣いてんのか？」

そんな人物と対面して、俺は

「うわあああああああああああああああああああん！」

俺は、年上の女に怒られている恐怖に堪えられなくなつて、盛大に泣き出しちゃった。

「お、おーーー、どうした？ や、や、かわいい！ いや、違う！
何なんだお前ー！」

それから數十分間の」とまばたいても思って任せきりにな。

もし思って出したら、立ち並んで窓の海馬を破壊してしまつかも
しれないから。

ただし、これだけは言つておいた。

こんな出来事でも、あなたと出来立てよかつた、と。

「……行つてきます」

俺は小さな声で言いながら、玄関の引き戸をゆっくりと閉める。
四月の初旬、外はまだ肌寒い。

今年度、初の登校である。なのに、心躍らない。ウキウキしない。
それもこれもすべて、昨夜のでも「」とのせいだ。

俺は歩きながら およそ八時間前を思い起します。

家に戻つてからとんでもない日に遭つた。

日付の変わり日から深夜一時に及ぶ説教を食らつた。しかも家族
ぐるみで。姉、母、父の順に鉄拳も食らつた。

「どうしてこんな遅くまで遊んでいたのか？」

訊かれても、理由が言えない。言えるわけがない。

だつて、「年上の女に泣かされて帰宅が遅くなつた」なんて口が
裂けても言えないじゃないか。俺にも男としてのメンツがある。い
くら殴られても口を割るわけにはいかない。

おかげで、門限が午後五時になつた。

おひなると、部活も途中で抜けないとならない。いつそのこと、

部活はしづらくサボってしまおつと細づ。やる気が出ぬも。まあ、もともと幽霊部員なのだけれど。

一方で、門限のおかげでお使いに行く」とはなくなりながら、家にいる時間はすべて漫画の手伝いに拘束される。

よもや中学二年生のスタートが「んな憂鬱な」となつてしまつとは思こもよらなかつた。

よつて、今の俺は超が付くほど不機嫌である。朝っぱらから、田に映る森羅万象が憎い。

コンクリートのひびから一所懸命生えているタンポポすら憎い。アウトロー気取つてんじやねーよ。俺はお前みたいな生き方を認めない。綿毛になる前に潰してやる。

無邪氣に笑つてゐる赤ちゃんのポスターすら憎い。何の意味もなく、泣く子も笑う子も黙らじてやるひづけへじゅう。

……いや、違うんです。

本来の俺ならば、『タンポポ』も『赤ちゃん』も愛でる対象にある。なのに、今日に限つては、この体たらぐだ。そんな自分にまた嫌気がさす。

「……はあ

新学年になつて早々、疲れた。疲労困憊だ。家から十数分かけて歩く中学校までの道のりがえらく長く感じる。

「よつ、高明…。えりしたの肩落として」

ぽんと背中を叩かれた。振り返ると、見知った女が立っていた。

「窓際に追い込まれたサラリーマンみたいになつてゐよ?」

「うむせえ。そんなん見た」とねえだろ、お前

「……三年前、退職する前のお父さんみたい」

「お前が肩を落とすなよ。悪かった。」めん

出合つて早々、氣疲れさせられる女だ、こつは。

彼女の名は、田井幸子。^{ひずいさちこ}近所に住んでいる幼馴染だ。幼稚園から付き合つてゐる。

「すこひい。わかつて。幸薄い子。

小学六年生の夏、俺が「幸薄い（さちひすい）子」と彼女の名前をもじつてからかっていたら、その数か月後、彼女の家庭はその通りになつてしまつた。田井稼ぎ頭のお父さんが会社を辞めたことにより一般的な経済状態の家庭から一転、平成の時代にもかかわらず昭和初期の「とき極貧生活を強いられるようになつた。

「九条高明が妙なあだ名でからかつたから、私は『薄幸体』になつてしまつた

彼女はそんな風に、自分の不幸体質をネタにしてゐるけど、こちとら正直笑えない。

彼女に負い田を感じていないと言えば嘘になる。

たとえば、年頃の女の子なのに私服のローテーションが一種類しかないことなんて、他人事ながら悲しくてやるせなくなる。まるで弱小高校の野球部並みの投手不足である。一回戦敗退間違いなしだ。

学校指定のジャージでそらをうつりついている姿もよく見かける。彼女は何食わぬ顔をしているが、気にしているはずがない。

あまりにも不憫でならないので、何とか彼女に服をプレゼントしようと試みたこともあった。

しかし、障害が多くきて挫折した。世の中には「できる」と「できない」との一つがあることを思い知った。

だから俺は

彼女が貧乏であることを認めて、ネタにして、開き直つてこる。

彼女も「同情されるのがいちばん嫌い」と言つてこるので、遠慮なく暴言を吐かせてもらつてている。

だが、もう一度言つ。彼女に負い田がないと言えば嘘になる。

臼井は俺の隣に並んで、空を見上げて言つた。

「やうなのが? クラス替えの張り紙見てねえや。知つてる奴はい

「やうなのが? クラス替えの張り紙見てねえや。知つてる奴はい

たか？」

「うん。 大体は知ってるよ」

臼井は友達が多い。元気で明るくて、気遣いのできる奴だからな。顔もかわいいので男子からの人気も絶大だ。

躁と鬱のギャップが激しいこともあるが、人に嫌われるような要因は少ない。

友達のほとんどいない俺とは大違いだ。

「高明の大好きな、中瀬古もいたよ」

「げつ……」

あいつも同じクラスか。昨日のこと、バレてないといいけどな。場合によつては、どんな手段を使ってでも口封じをせねば。

「あ、そうだ。今日こそは部活に来るんでしょうね？」

「いや、今日から門限が五時になつちまつたから行けそうにならないな」

「さうひと下手な嘘つくな。アンタは小学校低学年か」

「これがマジなんだつて。夜遊びしてたら怒られたの巻でござれる」

「本当? でも、アンタの家、規則厳しいもんね」

臼井は一瞬首を傾げたが、すぐに納得した。さすが幼馴染だ。理

解が早い。

「しかし、何だつていきなり部活のことを訊くんだ？」

「一応、アタシ主将になつたし? 幽靈部員には声をかけないと」

「幽靈部員がいちばん結果を残してるけどな」

「これでも昨年、400㍍走で、県六位の個人成績を残している。どうだ、すげだろ?」

田井は「うう」と唸りながら、絞り出すよつた声でつぶやいた。

「……アタシもバイクを買つね金あれば

「わいと重い嘘つくな。持つてんだろ、臭いのキツイやつ

たしか先輩のバイクを譲り受けたはず。

「臭くないわよー。つてか、まさかアンタ……嗅いでるの?」

「拷問は国際的に禁止されてるだ。嗅ぐわけねえだろ」

他人の足の臭いを由らテイステイングするなんて正氣の沙汰じゃない。そういうのが好きな奴は前世でよっぽど悪いことをしたんだろ?」

「……でもまあ、実際そいつ需要もあるよな」

「これは商品になるかも」と、田井はぶつぶつと呟つてゐる。

「いや、止めとけよ。変態に田をつかうれると厄介だぞ」

「変態でも何でもお金を運んでくれるのなら……」

「お前の言動はいちいち心配になるわー。変態親父が買つてくらいなら俺が買つて止めらわー。」

「はあ?.. やつぱり嗅いでるんじゃないの?」

田井がドン引きしている。だが、俺は構わない。

金に困った田井が何かとんでもないことをしでかさないよう、俺は色々と苦労しているのだ。自分で言うのもなんだが、本人が気づかない気遣いこそ、真の優しさなのである。

「やつやつ

田井は肩までまっすぐ伸びた黒髪を触りながら言った。

「春休みに入つてから部活に来なくなつたアンタは知らないだろ? けど、今日から新しい顧問の先生が来るらしいよ」

「そつか。前の顧問は別の学校に行つちやつたもんな

ほとんど部活に顔を出す人じやなかつたから、あまり覚えていないが。試合のときだけは世話になつたけど。

「噂によるとね、すうて美人なんだつてさ」

田井はいやらしげに笑顔を浮かべながら、俺の顔を下からのぞき込むように見る。

「まあ、ロリコンのアンタには関係ない」とだらうけだね……って、何で変な顔してるの？ そんな顔で生きてて恥ずかしくないの？」

「顔面を集中的に狙うのはやめろ。ドッヂボールなら反則だぜ。それ以上やるなら先生に言いつけてやるんだからね！」

俺は冗談を言いつつ、内心かなりとまどっていた。「美人」という人物に思い当りがあるからだ。

「何よ、高明」

俺の挙動に怪しいところを感じ取ったのか、田井は猜疑心に満ちた目をこちらに向けた。

「ひょっとして、そんなに美人教師が気になるの？ ロリコンなのに」

「うるせえ。何度でも言つてやるが、年上には興味ねえよ」

だが、気になつてしまふがないのも事実だ。昨日 あんなことがあつたからな。

いやいやいやいや。

……まさか。昨日の女が顧問になるなんて、そんなことは絶対にないはず。たぶん。

呼び出し

アンビリーバボー。奇跡体験とまでは言わないが、そのままかだつた。

現在、体育館で始業式が行われている。

「今年から赴任することになりました、佐藤ノリオです。体育の教科を担当します。大好物は「はん」です。サトウの」

新任、転任してきた教師たちが各自大スベリの挨拶をする最中、昨日の女は檀上のすみで異彩を放っていた。一人だけ醸し出すオーラが違う。ただ黙つてパイプ椅子に座つているだけなのに、それなぜだか様になつてしまふのだ。

たとえば、「あの人、実は女優なんだぜ」と言われても、何の疑いもなくうなずいてしまつだろ。俺が映画監督なら、彼女がオーディションにやつてきた段階で、すでにできあがつた脚本を変更してでも彼女を主役に抜擢するだろ。

俺は断じて年上好きじやないが、個々人の有する魅力はわかる。まあ、いくら魅力があるうとも、トラウマを刺激されるような存在に近づこうとは思わないが。ましてや万が一にも恋愛感情を抱く可能性なんか皆無だ。

「 今後ともよろしくお願ひします」

色黒のイケメン体育教師が頭を下げて、周囲から拍手が鳴つた。

がたつ。

女がパイプ椅子から立ち上がった途端、拍手がぴたりと鳴りやんだ。体育館にいる全員が、女に注目しているようだ。

- 1 -

女はさして他人の目を気にする様子もなく、威風堂々たる足取りで壇上の中央へと移動する。上向きにセットされていたマイクを口元に向けて、「『ほん』と咳払い。

して、
曰く

「……ああああああ、あの！ わわ私は、高野香奈です！ よろしくお願いしますっ！」

上ずつた声で言いながら、深々とおじぎした。

その後、一一秒、一秒……数秒の沈黙を経て

『二三の事実をもとに、この問題を論じておきたい。

学生たちが爆発的な喚声をあげた。体育館の窓が、びりびりと揺れてい。まるで人気歌手のコンサート会場のようである。この分だと失神者とか出そうだな。俺も失神しそうだ。ファン（？）の彼らとは別の理由で。

高野は口をぽかんと開けて、しきりに周囲をきょのねよる

と見渡していた。彼女の心境を察するに、

『何が起きたのかわからない』

といったところだらう。断言してもいい。なぜなら俺も同じ心境だから。いやマジで何なのこれ？ どうなつてんの？

『 いら、静かにしなさい！ 静肅に！ 静肅に！』

それから約一分後、教頭と各教員の懸命な努力によつて、喚声がざわめきに変化した。耳に届いてきたざわめきをいくつかピックアップし、俺はよつやく状況を正しく理解し始めた。

ざわめきは以下の通りである。

『すげえ美人じゃね？』

『でも、ドジっぽいところがかわいいな』

『俺ファン第一号！』

『……お姉さまと呼びたいわ』

『ボクは佐藤ノリオ先生の「ほんになりました』

結論。みんな彼女の魅力にやられてしまったみたいだ。一部、不適切な音声が混じつっていたが、気にしないでおこう。禁断（教師と生徒）×禁断（同性）の恋愛には関知しないのが吉。口クなことがなさそうだ。

「えつと、あの……」

ざわめきの途絶えぬ中、高野は再びマイクに向かっておずおずと喋りだした。

「……今年から新卒で採用されました。担当科目は英語です。新米のひよっこです。つたないところも多々あります、ぜひとも温かい目で見守っていただければ幸いです」

『美人英語教師サイバー』

『英語で罵りながら指示棒でバシバシ叩いてください』

『舐める奴がなまつぽで見下すひしゃづみーー』

すがすがしいくらい下品なヤジが飛びかう。昨日の中瀬古みたいにぶつとばされればいいのに。

それにしてもあの女、初対面のときと雰囲気が全然違うな。ガサツで男勝りでヤンキーなイメージがあつたんだが、それとは正反対の様子だ。もしやネコを被つてているのだろうか。……年上の女ならそれもありうる。

「……あはは

高野はヤジに照れ笑いしながら（猫かぶり）、弱々しい口調で言った。

「さ、最後になりますが、これだけは言わせてくださいー。」

またもや体育館が静寂に包まれる。

「 三年三組の九条高明くん」

俺の名前が呼ばれた瞬間、全校生徒の視線がこちらに集中した。数瞬のことなのに殺氣すらただよつていて。やべえ！ 何か知らんが大ピンチだ！

「大事なお話があるので、放課後、職員室に来てください」

途中で声がかき消された。それはなぜかって？

『おらあああああ、クラスメイトになつていきなりだが死ねよ九条一』

『お前のことは小学生のときから知つてゐるぞー。ロリコンで変態でブサイクのくせに！』

『デジマハケダエマオイタツゼスロコー』

突如、暴徒と化したクラスメイトに揉みくぢやにされたからだ。男女関係なく殴る蹴るの暴行を加えてきた。南米の熱狂的なサッカーサポーターでもさすがにここまでではないだろ？

「いやいや俺は無実だ、くつ！ 何もやつていな、がつ！ つーか、何なんだお前ら、ぐふつ！ そのチームワークは、うつ！」

クラスメイトの容赦のない猛攻に抵抗しながら、俺は死に物狂いで弁解していた。が、誰も聞く耳を持たない。こいつらは俺を半殺しにすることだけを考えているみたいだ。ちくしょう！ 八方ふさ

がりだ！

『やめんか君たち！』

『男の人誰か止めてーー！』

『いいぞヒジで打てーー！』

教師たちも必死になつて暴れる生徒たちを抑えようとしているが、まるで無力だ。一部、教師にあるまじき肉声も交じつっていたが、後日記憶した声質を頼りに人物を特定して、卒業後はお礼参りしてやる。絶対に許すまじ！

なんて、そういう考えている間にも、

「ぐつ！ ふつ！ うつ！ うえつ！」

拳、靴底、ヒジのどれかが次々視界に映るようになつた。俺の顔面、袋叩きである。リンチと言つてもいいだろ？

はたしてここは教育現場なのか？

そんなことを思った刹那だつた。

「……つー？」

あーにがつんと強い衝撃を食らつて 俺の意識は強制的にシャットダウンされた。

ふかふかの感触を後頭部に覚えた。はつと目を開けると、明かりの点いていない蛍光灯が見えた。

首をひねつて状況を確認する。周囲は白いカーテンに仕切られている。なんとなく状況が飲み込めてきたところで、消毒液っぽい匂いが鼻腔に広がった。

ここは保健室だ。保健室のベッドの上で、じばりく眠っていたらしい。

身体のところどころに痛みを感じるが、頭がやけにすつきりとしている。今朝から続いていた、寝不足による不快感がなくなっているのだ。

ふとベッドの横の棚に置かれていた時計を見ると、三時四十分を示していた。

「……あれ、おかしいな」

俺は見間違いかと思い、リラシと目を擦つて、もう一度時計を視認した。しかし、やはり時計の針は三時四十分を指している。たしか意識を失くす直前に見た時刻が九時半だったから、およそ六時間も眠つてしたことになる。……いや、いくらなんでも眠りすぎだろう、俺。

まあでも気絶させられちゃつたしょうがないよね、てな言い訳を心の中で唱えつつ、上半身を起こす。そしてベッドに座る形で、

「ううん。あの騒動は何が発端となつたんだ？」

「うん。あの女が何かを言つたんだ。えつと、そうだなあ。「大事なお話があるとか」とかなんとか。で、放課後に職員室に来い、みたいな」とも

「逃げよ!」

俺はただちに有言を実行に移した。もう放課後じゃないか。悠久とこんなところにいる場合じやねえ。俺が職員室に赴かずとも、あの女がやつてくる。モンスターがやつてくる。

昨晚のできごとにについて言及されたら、最悪、再起不能にさせられるかもしね。中学生が深夜に出歩く」とは、条例で禁止されているからな。

またもやよからぬ事態に陥るのはごめんだ。人生はゲームオーバーしたらそれで終わり。コンティニューなどない。ゆえに、戦つたら負けるとわかっているモンスターへの対処は、逃げることが最良なのだ。

部屋の出入り口へと猫まつじぐらじぐらしている途中、引き戸が自動的に開いた。

「おっ、ようやく起きたか

そう言いながら、高野が現れた。さて、いきなりラスボスとのエンカウントである。背後に逃げ道はない。終わった。ゲームオーバー

一だ。夜遅くまで中学生が遊んでいた罪を道理として、瞬く間に八つ裂きの刑に処される。

「田覚めていきなりになるが、ちょっと話がある。そこ」の椅子に座つてくれ。いいか?」

「……は、はい」

俺は指示通り、背もたれのない丸型の椅子に腰かけた。高野も、いつも保健室の先生が座っている椅子に尻を置いて、

「なあ、どうしてそんなにおびえてるんだ? 足が震えてるや」

と、訊ねてきた。それはあなたがいろんな意味で怖いからだ、なんて率直な感想は言えず、だつたら質問の根源を断つべく足の震えを止めてやろうと、俺は両手でひざを押さえつけてみた。しかし、まるで効果はなかった。ひざは、俺の胸中とは裏腹に大爆笑を続けている。

「まあ無理もないか。昨日は」

高野はすうっと息を吸つて、いきなり頭を垂れた。

「昨日はすまなかつた。あれは、全面的に私が悪かつた」

長い長い髪の毛が、波打つように跳ねた。

「……」

俺はてつ生きり夜遊びにふけっていたことを怒られるのかと予想し

ていたので、思わず拍子抜けしてしまった。あれれ？ 向こうが謝つてくれちゃってるよ？ どうこことなの？

「教員としての初勤務を翌日には控え、私はとても緊張していた。その緊張を何とかまぎらわすために、ついつい酒をあおりすぎていた」

高野は頭を下げたまま、謝罪を続けた。

「お前が泣き出すまで、私は我を忘れていた。いくら酔っぱらっていたとはいっても、これほどまでにお前を怖がらせるような言動を取つてしまつたことについては、本当に申し訳なく思つ。また、ケンカの止め方としても、あれは最悪の行動だつた。教師にあるまじき拳動だつたことを、深く反省している。許してくれなんて言つのは厚かましいが、どうか誤解だけは……いや、違うな。私が九条に言えることは、これだけだ。本当に」「めんなさい」

最後に謝つたきり、高野は微動だにしなくなつた。

「…………」

俺は時計が秒針を刻む音を聞きながら、思考をめぐらせていた。はたしてなんと答えたらしいのかと。

「のまま黙つていても埒が明かない。こんな状態のまま時間が過ぎ、時計が午後五時を回つたら、この世で最も恐ろしいできごとが我が身に降りかかるてしまつ。

ならばさつわとこの場を収めて、早々に帰宅しよう。それだ、それがいい。ベストアンサーだ。

俺はなかなか開かない口を無理やりこじ開け、全身全霊を賭して声帯を動かした。めちゃめちゃびびつてると、言ひつけ。喋るぜ。年上の女性に話しかけるぜ。

「あ……あの、僕こそ、あんな時間に、あんな場所にいたのが悪かつたんです。ここここここここ、申し訳ないです。だから、どうか、謝らないでくだ」「そつかー」

俺が言い切る前に、高野は素早い動作で顔を上げて、切れ長の目でこちらを睨めつけた。

「なるほど、言われてみればそつだつた。だったら先ほどの言葉は撤回をさせもらおうか。私が全面的に悪いわけじゃない。ふふふ、そうだ。そうじゃないか。涙を見せられたせいで、つい勘違いをしてしまつたんだ」

言葉の後半になるにつれ、声が次第に小さくなつてしまつたので、正確に聞き取れた自信はない。だが、これだけは自信を持つて言える。

答えを間違えた！

ああ、何たる失態。高野の猛省つぶりを鑑みるに、俺はあのまま怒つたふりをして、黙つて保健室から出てもよかつたんじゃないか。それが正解だつたんだよ、きっと。

無駄に勇気を振り絞つて、勇気果汁100パーセントにするべきじゃなかつた！

ちくしょつ、俺つてやつは。何たる間抜け。何たるたわけ。そし

て、いい人。善人。生き地蔵。泣いた赤鬼の親友。

「つーわけでだ」

俺が自己否定から自己自賛のフルコースを満喫しているところに、高野からの差し入れが加わった。

「昨夜の話はなかつたことにしよう。それで、構わないな?」

「…………は、は」

俺は即座にうなずいた。怒られずにすんだのだから、僕倆と言えよ。結果オーライだ。

「…………それにしても」

高野は訝しげな表情で言った。

「昨日も少し思つたんだが、お前はいさか緊張しそぎといふか、おびえすぎじやないか? 私がそんなに怖いか?」

「…………」

それを訊かれると、俺はたちどころに何も言えなくなつてしまつ。

「どうすれば緊張を解いて、まともに会話してくれる。何かアイデアはないのか?」

「…………」

「やつへつで良こから答へみてはくれないか？」

高野は優しい語り口で呟ねてきた。まるでそれは、保健室の先生のようだ。

「何でもいいだ？ な？」

彼女のスーツ姿が、一瞬だけ白衣に変わったような錯覚に陥り、そのせいか俺は、無意識にこんな言葉を紡いでいた。

「…………つ、両手両足を縛って、後ろを向いてくださいねば

「変態かお前は」

冷たい返事で、あえなくぱつぱつと切られた。これまたせっかく100%の勇気でアイディアを提案したのにそれが仇となつた。ちくしょう。これじゃあ俺は、〇点のチャンピオンじゃないか。まあ、言つ前からわかつちやいたけど。

ところが、高野は「やれやれ」とため息をついてから、意外や意外にも、

「わかった。両手両足を縛れはしないが、後ろを向いてやろう。そして、お前には絶対危害を加えないことも約束しよう。これでどうだ？」

やう言つて、椅子を反転させて俺に背を向けた。

「あつがとつぜこますー」

恐怖の対象である年上女性からの視線に解放されたおかげか、俺は水を得た魚のような心持となり、すぐさま感謝の辞を述べた。いやはや、ついおひがあるつて、いいよね。

「……ちえ、よどみなく答えやがつて。そんなに怖がらなくていいじやねえか

俺とは対照的に、高野は肩をがくんと落としていた。まあ我のことながら、こんな露骨な拒否反応を示したら誰だつて落ち込むよな。今まで出合つてきた年上女性もみんなそうだった。でも、しようがないんだよ。俺にはどうすることもできない。

ただ、あれだ。後ろを向いてくれた代わりと言つちやあなんだが、こちらも真摯な対応をすることを約束しよう。腹を割つて会話をする。心の中で、そう誓つ。

「とにかく九条。お前に聞きたいことがある。昨日、お前と一緒にいた中瀬古のことだ」

「何でしようつか?」

「お前らの個人情報は三年三組の副担任として、ある程度把握させてもらつた。だから、私がお前らの顔と名前を知つてゐるわけなんだが、まあそれはどうでもいいとして。中瀬古は今年の一月頃から、ほとんど学校に来ていない。そして、今日も出席していない。この原因について、何かお前は知らないか?」

「いえ、存じておりません」

「これはマジだ。あいつが何を考えて登校を拒否してこるのか、あ

ることはあいつが学校にいない間に何をやっているのかなんて、俺はまったく知らない。興味もない。

「そうか。なら、質問を変えよう。あいつが普段、どこで何をしているのかも知らないか？ 町でよく見かけたりすることもないか？」

「近場のゲームセンターにいるとか、コンビニにいるとか、そんなところにじょうか。中学生の遊び場所なんて、大体そんなもんですよ」

「なるほどな」

高野は嬉しそうな声を漏らした

「ふむ。しかし、私はこの町に来てあまり田が長くなくてな。正直、右も左もわからん。だから、町を案内してくれる人を探しているのだが……」

「はい」と俺は相槌を打った。

「九条、これも何かの縁だ、本田、町案内を頼まれてくれないか。もちろんタダでとは言わない。あまりおおっぴらに公言することは憚られるが、飯を奢ることを条件に依頼したい。どうだらう？」

「うめんなさい。僕はどうしても都合が悪いんです」

「そうか。それなら明日田でも」「いいえ」

俺は毅然と言い放った。

「明日も、明後日も、やつとこれかも平日のお放課後はダメですね」

高野は数拍の間を開けたのか、平坦な声で「ははは」と笑った。

「……私が怖いからか？」

「いや……そりゃ怖いのは怖いですけど、それとはまた別の理由があるんです」

「ふむ」と高野。

「（）の際なので誤解がないよう」とおもへと、門限があることです

「それは何時なんだ？」

「午後五時です」

「おい待て、嘘をつくなよ。私は見え透いた嘘が大嫌いだ」

高野の声に怒氣の色を帯びる。しかし、これは事実なのだから、俺はひるまない。俺も、見え透いた嘘は嫌いだ。誰もが嫌な気分にならない嘘は好きだが。

「嘘じやないです」

「しかし、昨日、お前を見かけたのは十一時過ぎだったぞ」

「あいにくながら、昨日のおかげでそつなつてしまつたんです。家に帰るのが遅れて、怒られました。また、その事情をうまく説明できなかつたので……やっぱり恥ずかしいじゃないですか、女性に泣

かされて遅れたなんて」

「これも事実だ。高野に文句を言つつもりはなかつたが、事実は事実。そのまま伝えるのがせめてもの誠意つてもんだ。」

「たしかに、女に泣かされた、とは言えないか。本当、申し訳ない」

高野はバツの悪そうな顔をした。

「一般に公務員の勤務終了時間は、午後五時以後でしょ」

「うん。私の場合は、お前の門限と同時刻だ」

「つまりは、やつこつことなんです。申し訳ありませんが」

「ふうん。……だつたら、そうだなあ」

高野は背もたれに身を委ねて、椅子を軋ませながら、

「じゃあ今日のところは予定変更だ。お前の家に連れて行け」

「え？ どうこつ」とですか？」

「「」家族に昨日のでも」とを説明して、誤解を解いてもらひ。もちろん、お前が泣いていたことは、伏せるつもりだ。お前も、このまま門限が午後五時になると困るだらう。」

「まあ、そうですが……」

ウチの家族を簡単に説得できるとも思えないが、門限の交渉に立

ち会つてくれるのならありがたい。願つてもないチャンスだ。

「なら、決まりだな。それで、午後五時までは部活の時間だ」

高野は椅子をぐるりと回して、じちらを向いた。……思えば、部活の存在を完全に失念していた。彼女は新任の教師で、それでいて

「今日から私は、陸上部顧問としても頑張るぜ。まずは手始めに、幽霊部員の門限をじじ開けるところからな。ふふ」

「…………はー」

つづつつ！

「これから、私は猫をかぶる」

保健室から校庭に移動している途中だった。校舎から青空の下に出た途端、いきなり高野は立ち止まり、ぽつりとそんなことを言った。

「お前と中瀬古以外の連中の前では、素の自分を隠すつもりでいる俺が「どうしてですか」と質問する前に、高野は言葉を続けた。

「ありのままの私を見せると、たいていの人は怖がるのだ。私みたいながさつでぶっきらぼうな女よりも、おしとやかで柔らかいイメージの女の方が、人から受け入れられやすそうだろ」

たしかに、と俺は心中で同意した。

「……いやはや、あんな辛い体験は教育実習のときだけで充分だ。時代錯誤なリーゼント高校生たちが己のプライドを曲げて七三分けに」

ぶつぶつと独り言のように喋るので後半の部分があまり聞き取れなかつたが、高野はえらく波乱万丈な教育実習を過ごしたらしい。

なのに、どうして教師にならうと思つたのだろうか。

機会があれば、いつか訊いてみたい。

「まあ、なんだ」

高野は大きく息を吸つて、大きく息を吐いた。

「これは、私の弱みと思つてもうつてかまわない」

「どうしてそんなことを言つのですか、と訊ねよつとする前に、またしても高野の言葉に遮られた。

「弱みを握っていた方が、お前が私と対等に付き合つてくれそうだしな」

高野は小悪魔のような笑顔を浮かべながら俺を見て　しかし、すぐに平然とした顔つきになつた。

「何か言いたそうだな？」

「……はい。そんな風に言えることが弱みだとは思えません」

俺が正直な感想を述べると、高野は小さく鼻で笑つた。

「それでもないぞ。本当、人から怖がられるのは嫌なもんだよ。別に善人ぶるわけじゃないが、『泣いた赤鬼』の赤鬼の気持ちがわかるんだ、私は。昔から　そうだったからな。じゃあ、行くぞ」

高野はそう言つて、再び歩き出した。その後ろを追いながら、俺は彼女の言葉を反芻していた。

しかし、まるで納得できなかつた。

彼女が人から怖がられていた要因が、はたして言動によるものだけだったのだろうか。疑問だ。見た目は気後れするのほど美人だが怖くはないし、口調も男よりも男っぽいが怖くはない。俺が彼女を恐れている理由は、単に彼女が俺より年上の女性だからだ。猫をかぶつていようがかぶつていまいが、関係ない。

そのところを勘違いされちゃあ困るので、この際年上の女性が苦手であることをぶつちやけてしまおうかどうしようか、なんて悩んでいたが、すぐに校庭にたどり着いてしまい、俺はいつたん思考を中断した。

校庭は縦、横400mくらいの広さがあり、その中心には一周200mのトラックがある。グラウンドで活動を行っているクラブは、陸上部のほかに、野球部、ソフトボール部しかなく、それぞれが均等に三分の一ずつの面積を使用している。

今日は野球部、ソフトボール部ともに活動していないらしく、校庭は閑散としている。ということで、トラックの周りをだらだらと走っているのはもなく陸上部の連中だ。

砂交じりの冷ややかな風が顔に当たる。俺は皿をつむつて、風が収まるまでじつとしていた。

「なあ、九条」とすぐ隣から名前を呼ばれた。

「どうされました?」

答えながら皿を開いて隣を見ると、高野は手の甲で皿をこすつていた。

「「Jめん。ちよつと待つてくれ」

どうやら砂が田に入つたらしい。始業式のときと同じ、案外間抜けだ。

「……よし、もう大丈夫だ。さて、改めて。なあ、九条

「どうされました？」

「陸上部の部員数は、計九人だったはずだよな？」

「そうですよ」

「しかし、校庭には、お前も含めて四人しかいないじゃないか」

高野の言つとおりだ。女子一人と男子一人、そして俺を含めた四人しか存在しない。

「陸上部でまじめに活動しているのは、そこにいる二人だけですよ。他は幽霊部員です」

「……そうなのか。前顧問の方からは、お前だけが幽霊部員だと聞かされていたんだが」

高野は確認するように言いながら、親指と人差し指であることをつまんだ。

彼女の言葉から推測するに、俺は練習にはほとんど顔を出さなかつたが、いちおう試合には出ていたし、かつ結果も出していたので、前顧問の記憶に残っていたのだろう。つーことは、他の部員は完全

に記憶から消されてるのか。ひでえ顧問と、ひでえ部員だ。まあどうもどじりだけど。

「もしかして、がっかりされましたか？」

訊ねると、高野はぴくっと頬を動かしてこちらを向いた。

「……ここや。やることは何だな。うん、そつだ」

自分の言葉に納得するように、高野は一度うなづいた。

「教えてありがと、九条」

「……い、いや、れ、礼には、及びませんよ」

高野があまりにも綺麗な笑顔を見せるので、俺は返事に戸惑ってしまった。彼女には、年上の女性に抱く『怖れの感情』とは別の理由で緊張する。

そういうや、二つの間にか『怖れの感情』はほとんどなくなっていました。ほんの短い時間だけれど、これほど自然に年上の女性と会話できたのは何年ぶりだろうか。

などと感慨にふけっていた矢先のことだった。

「お前の言葉で決心がついたよ」

高野が意味深な言葉を呴いて、一步、一步と校庭の土を踏みしめた。

「あ、高野先生だ！」「隣に九条もいる！」

遠くにいる一人の女子が俺たちの存在に気がついたらしく、やや興奮気味に騒いでいる。その一方、残る一人の男子はこちらを見向きもせず、黙々とジョギングを続いている。

高野は両手でメガホンの形を作り、それを口元にあてて叫んだ。

「おーい、陸上部のみんなー！ 挨拶するからこっちにきてー！」

思わず笑つてしまつところだった。なぜなら高野の発した声が、幼児向けテレビ番組のお姉さんのような添加物まみれの声だったからだ。素の状態とのギャップがあまりにもひどい。まるで『カニカマ』レベルの加工つぶりだ。説明書きがなければ原材料が確實にわからない。

女子一人は駆け足で、男子一人はジョギングのペースのままこちらにやつてきた。これにて陸上部、全員集合である。

女子の一人。一人は、臼井幸子である。陸上部主将。まじめで謙虚な優等生だ。

もう一人は、ポニー・テールが特徴的な鶴本茜音つるもとあかねだ。彼女は俺好みの小柄な体格をしていて、臼井に引けを取らないくらいの可愛らしい顔をしている。性格は素直で人当たりもよい。つまり、超俺好みである。

ところが、まつこと恨めしいことに、彼女は彼氏持ちだ。本人いわく、「高校生の彼なの」とのこと。

その事実を知った瞬間から、俺は陸上競技で頑張ることを辞めた。

そう。実はそういうことなのなのだ。俺の心のかざぶたを剥がすと、彼女への思いの深さが垣間見えるかもしれない。

……さて、気を取り直して。

男子は一人。名を谷垣元春たにがきもとはるといふ。彼は俺の後輩にあたる。無口でクール。最近の流行り言葉で言うと、いわゆるイケメンというやつだ。なおかつ高身長で学業も優秀。一見、非の打ちどころのない完璧人間のように見える。

しかし、彼には一つだけ致命的な欠点がある。

それは 体毛が濃すぎるいたみがきもとはることだ。首から下の体毛がハンパではない。その見た目から、俺は彼のことを「実は四足歩行」というニックネームで呼んでいる（心の中で）。だつて、ビニからどう見ても知能の高い動物のそれとは思えないからだ。

よく言えば、ワイルド。悪く言えば、初期人類。

「これ以上は悪口になるので、彼の紹介はここらで終わっておく。

「これでみんな、集まってくれたね」

高野は満面の笑みで部員たちの顔を見回した。

「それではさっそくミーティングを始める 前に、自己紹介をします。今日から陸上部の顧問を務めます、高野です。陸上競技の経験はないけど、これから精一杯専門的な知識をつけて、みんなと一緒に

緒に頑張つていゝつと思ひます。よろしくお願ひします「

言い終えて高野が頭を下げる、女子一人が勢いよく拍手を鳴らした。少し遅れて、俺もそれに続いた。谷垣は微動だにしなかった。

「ありがとうございます、みんな。それじゃあ、ミーティングを始めますね」

顔を上げた高野は、ぴくぴくとニヤついている唇を真一文字に結び、白々しく「ほんと一つ咳をした。

「いきなりだけど、みんなに課題を出したいと思います。その内容は、難しい人には難しく、簡単な人には簡単なものです。そのテーマは」

高野の田つきが一瞬するどくなつた。が、すぐに丸みを帯びた状態に戻つた。

「陸上競技を行つ目的です。目的の内容はそれぞれ異なりますから、内容は自由です。目的を紙に書いて、私に提出してください。紙はどんなものでも構いません」

「はいはーい、高野先生質問でーす!」

小柄な身体を大きく動かして、鶴本は手を挙げた。

「提出期限はいつですかー?」

「いい質問ですね。提出期限は設けません。目的が見つかり、その目的を私に教えてくなつたら提出してくださいね」

「はいはーい、わっかりましたーー！」

美女と美少女が互いに微笑み合つ。今すぐにでも願いが叶うならば、一眼レフで撮影して、永久保存したい光景だ。

「……あの、俺も質問していいですか？」

珍しく谷垣が声を出した。

「どうぞ」と高野が先を促すと、谷垣は宙に田線を泳がせた後、再び口を開いた。

「どうして『田標』じゃなくて『目的』なんですか？」

これまた珍しい、どこかいらだつているような、反抗的な声色だった。いつもは声に感情を出さない彼なのに、突然どうしたのだろうか。

「よく『気がつきましたね、谷垣くん』

高野は、さつき鶴本に見せた笑顔とは違う、小悪魔的な笑顔を浮かべた。

「まあ特に深い意味はありませんけどね。今後いつか田標を記ねることもあるでしょっし」

谷垣は数拍の間を置いてから、「やつですか」と言つた。いつも

の冷淡な声色だった。

「他に質問はないですか？」

高野が言いながら、田井と俺に田を向けてきた。

「ありません」「ありません」

偶然にも田井と返事が重なった。

それがおかしかったのか、高野は「大きな蛾がやつてきそう」とくすりと笑った。いやいや。モスラが呼べるほどい、美しいハーモニーではなかつたのだけれど。

「わかりました。ミーティングは以上です。では、今日は君たちのふだんの練習風景を見学させてもらいます。各自、準備を終えたら、練習に取り掛かってください」

発音がイイネ！

部活の途中で、高野が校長に呼び出しへりつた。

「もし練習が終わるまでに私が間に合わなかつたら先に帰宅してくれ。要件が済んだらすぐに向かつ」

彼女はそう言い残して、その場を後にした。そして結局、彼女は練習が終わつても校庭には現れなかつた。

そんな経緯を経て、俺は臼井と一緒に下校している。練習着（ジャージ姿）のままの「」と並んで帰るのは久々だ。

「ねえ、高明」と臼井が切り出した。

「アタシ、アンタが年上の女の人とまともに会話してるのは初めて見たかも」

「あー、そうだな」

ミーティング後、練習が始まつたものの、俺は練習着を持つていなかつたので、高野と喋りながら見学をしていたのだ。

ちなみにこれは余談になるが、高野は陸上競技の知識はほぼゼロに等しいようで、しきりにあれこれと訊いてきた。

こんな調子で顧問が務まるのかと俺は一時心配に思つたが、指導者としての熱意が十二分に伝わるほどの質問攻めに遭い、すべての質問に答え終わる頃には、それが杞憂だつたと思い直した。

「ただ、まだ田を見て話すのは無理だけだな。……怖いし」

「怖い?」

「うかー、と田井は首を傾げる。

「ていうか、なんでアンタは年上の女の人が苦手なんだ?」

「わかんね。気がついたらそういうなってた感じだ」

「これは真っ赤な嘘だ。間違いなく母と姉の影響であることは断言できる。だが、身内のことを悪く言ひるのは俺のポリシーに対するから、嘘で」まかしておぐ。

そんな俺の心情を知つてか知らずか、田井は納得できないような語調で、「ふーん」と言つのだった。

なので

「まあ、あれだよ。感情なんて大体そんなもんだろ?」

俺はやうに言つて訳を重ねて、彼女の気を別の方向に逸らすとしたくらんだ。

「たとえば恋だつて同じだ。気がついたらそういうなってるんだ」

まあこんな風に、かつてよく決めて見た次第であるが、いかがかな? マドモアゼル?

「アンタが言つと眞事に気持ち悪いね」

「つむ。田井の気持ちを『疑い』から『嫌悪』に変えるには成功したが、その副作用として、薬葉の猛毒を浴びせられた。

「あまりに気持ち悪くて吐きそつになるよ。胃の中のものだけじゃなく腸の中のものまで全部」

「お前の発言の方が気持ち悪いわ」

「腸の中のものって、無修正で言つて、ウンノじゅねえか。もつすぐノールだつてのこ、わざわざ返してくんなよ。ウンノ」

「そりゃアンタがこんなにも気持ち悪いんだから、さすがのウンノも動搖してノースを間違えちやつよ」

「いやいや、胃から上部はウンノ進入禁止になつてゐるだろー。食道より上に出たら大惨事になるぞー。」

「進入禁止?」

不意に田井は冷笑を浮かべる。

「アンタは考えが甘いね。ウンノがいつも道路交通法を遵守するとは限らないでしょ? ましてやアンタがこんなにも気持ち悪いんだから」

「オーケー、わかった。ウンノさんの気分を害して悪かつた。謝る。陳謝するよ。すまなかつた」

「わかればいいんだよ。それと、これも誓いなさいな。これから先、ウンコを保有する生き物の前で愛だの恋だのと誓つちやだめ」

「了解した。金輪際、恋愛に関する発言はしない。ウンコに誓つて、ついでに紙にも誓つておけば? 今回の一件の尻拭いをしてくれかもしれなし」

「なるほど、それは名案だ」

「のやつたりに不自然な笑い声が付いていたら海外ドラマだ。俺と田井は、小学生のときから、こんな『じつ』遊びをすることがある。

『じつ』を極めると、ドラマになるんだわ! しかし、アドリブでは、そこまでのハイクオリティーな演技はできない。まあせいぜい、俺たちの間だけで楽しんでもらうことで手一杯だ。

「まあいいや」と、田井は仕切りなおすよつて叫ぶ。

「それよつと、あの課題つてどうゆつて?」

「ああ、陸上競技を行つてやつた。俺ひとつては簡単な課題だ」

田井は、「へえ」と意外そつとする。

「ちなみに、アンタの田井は何なの?」

「そら 女にモテるためだ」

足が速い野郎はモテる。俺は、どこからか耳にしたその神話を頑なに信じて、陸上部に入部した。

練習を重ねるにつれて、足はどんどん速くなつた。中学一年のときの運動会では、同学年で一番足が速かつた（短距離も長距離も）。本種目の400mでは、市内の大会でも優勝するにつになつた。

「実際のところは、どうなの？」

「うるせえ！ 知ってるべせに！」

結論から言つと、まったくモテなかつた。「先輩、このタオル使つてください！」みたいなことは、一度たりともなかつた。神話はしょせん、ただのテーマに過ぎなかつた。

「じゃあアンタ、今は完全に目的を見失つてるじゃん

「……そうだよ。だから俺は練習に出ないんだよ」

また新たな目的が見つかれば、練習に出るかもしれない。ただ、あと数ヶ月もすれば、引退の時期がやってくる。それまで、怠惰な日常を送るのも悪くない。楽だし。どうせ頑張つてもモテないし。

「……なるほどね。この課題の狙いはありますか？」

田井がぶつぶつと小声でひとこと言つてくる。

「つーか、そこつまんないんだよ？」

「え、アタシッ！？」

なぜかびっくりしたように田を丸くする田井。会話の流れとしては極々自然だったと思ふんだけど。

「……アタシは、そうね。アンタとは違つて、高尚な目的があるよ」

「つまり？」

「」、「高尚な……目的が……あるはずよ」

「お前も見つかってねえじゃねーか」

陸上部主将のクセによお。大丈夫か、陸上部。

「主将だから高い目的があつて当然、なような気がすんの！…つか、モテるためにやつてるとか単純すぎるでしょ！…足が速くてモテるのは小学生までよ」

「うわせえー、じかとりかんなの百も承知だ……よ~」

つてあれ？

いや待てよ。俺はこの一瞬の間で、すこことことを思ついたのかもしれない。

といふか、今までどうして気がつかなかつたんだ。そうだ。そういうのふははは。

「田井、ナイスプレイだ。俺は決めたぜ！」

「何よいきなり」

田井は怪訝そうなりで俺を見る。

「さうそく今から ぶらつと小学校の校庭を爆走してやるぜー。」

「小学生の女の子にモテるために?」

「つたりめえだ! 濡れたタオルが何枚もらえるか、楽しみだぜー。」

今こそ積年の夢を叶えるときがきた。日本の夜明けぜよー。

「それ、実際には、警察官から『これで頭を冷やしてください』と手錠を渡されそだよね」

「そんなちちに拘束具で俺を止められるもんか。これで……これでついに、俺の時代の到来だぜ」

ちゅうどこの近所に小学校があるしな。なんとまあ絶好のチャンス。思に立つたが吉田というのもだ。

放課後の校庭を無邪気に遊びまわる天使たちに そうだ、会いに行こう。

俺が羽よりも軽い足取りで「ランランラン」とスキップをした。と同時に、どこからともなく、ノスタルジックなメロディーが流れてきた。午後五時を知らせる、あの音楽。

「あれ」と田井が何かに気がついたようなじぐさを見せた。

「そう言えば、アンタさあ」

「ん？」

「門限はどうなったの？」

「…………あ」

臼井に指摘されるまで、完全に忘れていた。門限は午後五時だ。ただいま絶賛放送中の音楽は 午後五時の合図。今から急いで家に戻つても、門限には間に合わない。つまり、門限を破つてしまつた、ということだ。

「顔が真つ青になつてゐるけど、大丈夫なの？」

臼井が心配そうに俺の顔をのぞき込む。

「…………まあ、しかし、きっと大丈夫だ。高野が何とか弁明してくれるはずだから。うん。大丈夫。最悪、命を取られることはないはず。」

「アンタの家、相当スバルタで厳しいんだよね？ 近所でも噂になつてるけど」

「いやいや、そうでもない。ちょっと血が出たり、意識を失つたりするくらいのもんだ」

「そんなことされたんのー？ そりゃアンタの人格も破綻するつて もんよね」

「おこやめ。ストレスのあまり若くして頭髪を失つた男を見るよ
うな田はやめ」

言つておくが、俺の人格はノーマルだ。一般的の中学生のそれと大差はない。

憐憫のまなざしを向ける臼井に対して、いかに九条家が普通であるかを説明しようとした、その瞬間だった。

「あつ！」

聞き覚えのある声が、耳に飛び込んできた。

振り返ると、駄菓子屋で出会った少女がこちらを指していた。

「アイスのお兄さんだ！」

少女はランデセルを鳴らして駆け寄り、やがていつと頭をさげた。

「んばんはー！」

「やあ、今日も会つたね」

「はい！ 昨日ありがとうございました！ えっと、これ……」

言いながらポケットからうさぎの形をした小銭入れを取り出し、
その中から四枚の百円玉をつまんでこちらに差し出した。

「あまたおつりです。それと……アイス、おいしかったです」

一瞬くぐりついた。少女の上田使いが反則的にかわいいので、危うく俺は理性を失いかけたが、何とか平静を装いつつおつりを受け取つた。

「うふ、それならよかつた。あと、おつり返してくれてありがとうね」

「はいー。」

とびあつ、もと「ロツカリ」（かわいさの最上級を表す言葉）の笑顔で返事をする少女。頭の芯がしげれるほどキューートだ。

「ロツ　高明、」の子は?」

「悪意のある呼び名が聞こえたが、まあいい。」の子とせ、駄菓子屋でな」

俺は一連のできいとを田井に伝えた。

「そんなことがあつたんだ。アンタも中瀬古もなかなかの不幸氣質よね」

俺はロツカリ出せなかつたが、お前もな、と心の中つづつこんだ。

「ねえ　君」

田井は少女の前に移動して、すつとしゃがんだ。

「私は田井幸子。君のお名前は何といひの?」

「あー、はー。わたしもマキと言います」

「マキちゃんかー。かわいい名前だね」

「ありがとひびこます。お姉さんもかわいいお名前です」

少女 マキちゃんは本当にかわいい。この瞬間で辞

が言えるとはな。

「あの……」

マキちゃんは田井に頭をなでられながら、一いつ瞬を見た。

「お兄さんのお名前は何と申しますか?」

「俺は ハーレーダビューペーパーの主人

はじめて答えるよつとしたじいじい、田井に間違った名前を上書きされてしまった。

「おこひじりじこお」

「広辞苑によると、長いものに巻かれるしか能のない、中身がすかすかな人間のことを指すらしいよ」

「俺が長いものに巻かれたことなんか一度もねえぞー。」

「じゃあ、あれ。長い長い物語の最後になつて、まさしくトイレスペーパーの芯のよつて済残に使い捨てられる主人公のことかな」

「んな物語あるかー」

田井の発言がイレギュラーにすぎる。石だらけの河原でノックを受けている気分だ。

一方その頃、マキちゃんは「べ、え?」と皿を皿黒をせていた。
「トイレットペーパー・ノシンセー? お兄さんと外人さんなんですか?」

「じつちかとぬつと、人外だよね」「うよつと面白こから許すけビ。

「あのね、マキちゃん。俺の前は」「あ、お父さんだ!」

俺が改めて自分の名を叫びたとしたじりで、マキちゃんの興味が別の方向に行ってしまった。……実に無念。

マキちゃんの視線を追つと、スーシ姿の若く男性が遠くに立つていた。こちらを向いて、手を振つてくる。

「それじゃあ、わたしはお父さんと帰ります

マキちゃんはわざと前置きをして、

「幸子さん、やめなさい。トイレットペーパー・ノシンセー? ……グッバイ

最後まで誤解したまま行ってしまった。

自宅前に立つていてる電灯が、ちかちかと不規則に点滅している様子を、俺は何となく見つめていた。

「シシコシコシコシ。ハイヒールとコンクリートのぶつかる音が近づいてきた。

「あっ、先生。いらっしゃりです」

「おつと、ここか。地図を見るのが苦手で予想以上に遅れてしまつた。すまない」

高野は早足で現れるや、地図を持つ手で手刀を切つた。どうでもいいが、彼女はいちいち拳動がオッサンっぽい。

「ほう、ここがお前の家か。ずいぶん立派な家だな。といふか、どうしてそんな落ち込んだ顔をしてるんだ？ まさか門限を破つたせいで、もうすでに家から放り出されたのか？」

「……いえ、違います」

心配されるほどのことではない。マキちゃんに間違つた名前で記憶されたことに落ち込んでいるだけなのである。今日の晩飯はトリカブトの煮付けだったらしいなあ。

「ついわざわざ到着したばかりなので、家の中には入つてしまふ

ついたさと黙つても、もう数十分は経つけどな。

寒空の下、高野のことをずっと待っていたのだ と呟つと、まるで恋愛小説のような響きになるが、自宅に入らなかつた理由は生命の危機を感じるからだ。別の意味で、心臓がどきどきしてくる。

「やうか。なら、さつそく行くか

「あつ、ちょっと待つてください

俺はすたすと歩きだす高野を制止した。

「ん、どうかしたか?」

「ウチの家族に会つ前に、先生に一つだけ忠告しておきます

「……おこおい、やめてくれ。私はびびりなんだぞ」

高野は言ひながら、俺の眼前に手の平をかざした。

「ほり見ろ。今も手汗が尋常じゃないんだ。あまり私をびびらせないでくれ

見ると、手の平が汗でじつとりと濡れていた。一見、涼しげな表情をしている彼女だが、内心は穏やかじゃないのか。そういうや今朝の対面式でもひどいありさまだつたもんな。クールな顔して人一倍、緊張してそうなタイプだ。

思い出して 異様をせりとつかまれたような感じがした。

「えつと……びびらせつもつはなかつたのですが、ウチの家族は

全員変わり者なので、そのことだけは事前にお知らせした方がいいかなと」

「ほひ、変わり者か」

高野の表情が和らいだ。

「私も知人からそういう言われることがよくあるな。お前は変わっているぞ、ど。ちなみに聞いてみたいんだが、お前も私のことを変わり者だと思うか?」

「……いえ、外見も内面も普通の女性らしいと感じますよ」

拳動や口調はおひやんみたいだけじな。それは言わないでおく。

「やひか。見え透いたお世辞とは言え、うれしい」

高野は皿を細めて子どもっぽく笑った。

「何度も氣を遣わせて悪いな。おかげで交渉も頑張れそうだ。では、行くぞ」

「……はい、お願ひします」

高野がインターホンを押した。家の中から、ピンポーンと音が聞こえる。

呼び鈴が鳴りやむと同時に、「びひび」、と声が返ってきた。姉の声だった。

姉は玄関先にいる。きっと俺を待っていた。待ち構えていたのだ。
何ために なんて、怖くて口にできねえよ。

「お邪魔します」

高野が玄関のドアを開くと、その向こうに姉の姿が見えた。姉は仁王立ちのポーズで禍々しいオーラを全身にまとっていた。しかし、高野に田に向けるや、驚きの表情を浮かべて、「へっ?」と聞抜けな声を出した。

「私、富山中学の高野と申します。事前の連絡をせずに押しかけて誠に申し訳ござりません」

高野は深々とおじきしながら、立て続けに言葉を紡いだ。

「本日は急遽、九条さんのご自宅に家庭訪問に参りました」

「……は、はい」

姉はぽかんと口を開けていたが、高野が頭を上げると、すぐに顔を引き締めた。

「えつと……愚弟のために、わざわざ足労下りて誠にありがとうございます」

そして意外にも、懇懃な挨拶を返した。

「しかし非常に申し上げにくいのですが、両親は仕事の都合上、現在自宅にはおりません」

「え……あつ、そ、そつですか」

高野は振り返り、困惑した顔でこちらを見た。おじぎすんだとでも言いたげの「」様子であるが、まあどうしたらいいんだろうね。俺にもわからない。

思えば気が動転していて注意を払っていなかつたが、自宅前の駐車スペースに両親の車はなかつた。今日に限つて一人とも帰つてするのが遅いとは、何とまあタイミングの悪い。

しかし、今さらそれはどうしようもなく、ここで簡単に引き下がつてもらつちやあ困るので、俺はファイティングポーズを作つて、高野に頑張れとホールを送つた。ここからが勝負だ。

と、そんなことを思つていたら、姉からこんな提案が飛び出した。

「あの、高野先生ですか。せつかくわざわざおいでなさつたのですから、私でよければ先生のお時間が許す限りお話をつかがいますよ。その最中に両親が帰つてくれば、そのままお話を両親に引き継げばいいですし、高野先生がお帰りになるまでに両親が現れなければ、私から両親にお話を伝えておきますから」

俺はこのとき、奇妙な違和感を覚えた。

考えてみればおかしいのだ。来週の末に控える漫画大賞の応募締め切りに追われている多忙な姉が、俺にまつわる案件に応じるなんて。姉にとつては時間の浪費以外の何物でもない。

しかし、なぜだ？ わからない。

「いかがですか？」

「……願つてもない」提案ですが、その

高野は言ひよどんで、またもやいちらを振り返つた。そのときだつた。

「ねえ、高明もそれがいいと想ひでしょ？」

姉は姉にあるまじき猫なで声を発した。俺は確信した。この後、とんでもないことが起つた。また同時に、それを回避する術がないことも。

「……はい」と俺は答えた。

弟は、姉の命令には絶対に従わなくてはならない。とんでもない被害をこうむることがわかつていても、やむなくそれを受け入れなければならぬ。背くことは決して許されない。

なんぞつて？

いつも問われると、もはやテンプレートになつた答えしか返せない。察してください。死にたくないんです。もつ一度言つ。死にたくないんです。

「さあ高野先生、どうぞお上がりください」と、促す姉。

「……ええ。それではお邪魔します」

高野は家に入る間際、一いちらを一瞥した。俺はとっさに指で輪を作り、はにかんだ。でも、うまく笑顔を作れた自信はない。

高野に続いて、俺も家の中に入った。玄関の脇に立っている姉を横切る 瞬間だった。

「童貞のくせになかなかいい女を連れてきたじゃない。今日の晩御飯はお赤飯ね」

俺の耳元で、姉がささやいた。

「アンタの血で炊いた」

「.....」

まあ。

お赤飯に使われる小豆と血液に含まれている赤血球はよく似ているから、それもありか なんて悠長なことを考えている場合じゃない。

俺は何といふことにしてしまったのか！

目先の利益しか見えていなかつた。他人の力に頼つて門限が遅くなればいいなー、くらいしか思つていなかつた。過去を思い起こせば、こうなることは事前にわかつていたじやないか。

昔から、俺が女の子を家に連れてくると、姉は烈火のごとく怒り狂うのだ。

怒りの理由はその時々によつて変化するので、姉がなぜ怒つているのか、本当のところはわからないのだが。

……ともかく、ミスつた。

もはや負け犬の遠吠えにしかならないが、やはり年上の女性と一緒にいると、どうも調子が狂つてしまつ。こんな初步的なミスをするなんて。

最悪な事態を招いてしまつた俺にはたして『今後』があるのかどうかは定かじゃないが、事は慎重に計画せねばならんと肝に銘じておいた。こんなあやまちは、一度と繰り返してはならない。

「高明、リビングまで先生を案内してあげて」

と、いう姉からの指令が出たので、俺は高野を追い越してリビングに向かつた。

リビングに入ると、後ろから姉の声が飛んできた。

「先生、そちらのソファーにお座りください。私はお茶を淹れていますので、少々お待ちください」

「あつ、お構いなく」

姉の姿がキッキンに消えたところで、俺と高野は並んでソファーに座つた。

すると、いきなり高野のひじ鉄が俺の脇をこづいた。

「驚くほどできた姉だな。まあ、変わっていると言えば、変わつて
いるが……」

高野の耳打ちに、俺はどきどきしつつ、うなずいた。正直、俺も
驚きだ。いつ、どこので礼儀作法を習得したのだろうか。

そんなこんなが気になるが、今はとりあえずいい。これ以上、姉の
逆鱗に触れぬよう細心の注意を払おう。集中だ、集中。心を研ぎす
ませぬ。

「お待たせしました」

御盆に三つの湯のみを乗せて、姉がやつてきた。

「粗茶ですが、どうぞ」

言いながら、慣れた手つきでテーブルに並べた後、姉は俺たちの
向かいのソファーに腰を下ろした。

「ありがとうございます。いたします」

高野の言葉を合図に、俺たちはそれぞれ手元に置かれた湯のみを
持ち上げて、熱い緑茶をすすつた。

「さて」

真っ先に姉が口を開いた。

「お話をうかがう前に……申し遅れました、私、高明の姉の九条京
くじょうきょう

子と申します。以後、お見知りおきを

「はい、いかがなよろしくお願ひいたします」

一人は落ち着き払つた様子で、頭を下げ合ひ。

「では、要件をお聞かせ願えますか？」

「かしこまりました」

高野はすうつと息を吸つた。

「单刀直入に申し上げます。高明くんの門限について、お話をあり、
ここにやつてまごりました」

「弟の……門限ですか？」

姉の眼球が一瞬、俺の方を向いた。お前、この女に何を言った
とでも考えているに違いない。おおつ、マジで怖い！

「はい。事情は高明くん本人から聞きました。昨夜、彼の門限が午
後五時になつてしまつたと」

「そうですね。家族会議の末、そのような決定が下されました
…それに関して何かおつしやりたいことがあるのですか？」

高野は毅然とうなずいた。

「まさしくその通りです。ちなみに京子さんにおうかがいしたいの
ですが、高明くんの門限が早くなつた原因は、昨夜、彼の帰りが遅

かつたからですよね?」

「ええ、そうですよ」

「実はその……彼の帰りが遅れたのは、私のせいなんです」

「……なるほど。もっと具体的に教えていただけますか?」

姉の表情がひときわ真剣になつた。ここからが説得の正念場だ。

高野先生、頼むぞ!

「はい。高明くんと出会つたとき、お恥ずかしながら、私はひどく酔つぱらついていました。明日に控えた初勤務のプレッシャーを紛らわすために、たくさんお酒を飲んだからです。しばらく記憶を失くしてしまつべりー」

高野が照れたように頭をかいた。姉はくすくと笑つた。

「居酒屋の帰り道でした。気がついたときには高明くんに介抱されていました。彼には本当に悪いことをしたと思ひます。彼は『私を介抱していたせい』で帰宅が遅れたのですから」

実際は少し違うけどな。

高野は俺のプライドを守るために、一部の情報をえてくれている。これで俺が泣かされたことは誰にも伝わらない。俺と高野の二人だけの秘密だ。

……先生、ありがとうございます。

「そして先ほど申し上げた話の冒頭に戻りますが、本日、私と高明くんは富山中学校で再会し、会話をする中で、門限が短くなってしまった旨を聞きました」

高野は田線を上に向けた。

「そこで私は思い立ちました。これは何としても家族の方に事情を説明して、彼への誤解を払拭しなければ。ということで、こうしてやってきた次第なのです」

「そういう経緯がございましたか」

姉はため息をついた。

「実は昨晩、帰宅が遅れた理由を高明に言及したのです。でも、なぜか高明は何も言わないので、私も両親も困り果てていたのです」

「それはもしかすると……私に気を遣つて……」

「たしかに弟は妙に他人に気を遣うくせがありますからね。それが姉として誇らしい部分でもあるんですけど……それはさておき」

姉は「ほんと咳払いした。

「これで事情がはっきりしました。両親に報告すれば、十中八九、門限は通常通りになることでしょう」

「そうですか。それはよかったです。」それで高明くん、明日から心置きなく部活動に参加できますね

「………… はあ」

完全に忘れていたが、部活なるものもあつたな。

……まあ、門限を元に戻してくれたし、何度か顔を出すだけないか。

「では、一件落着と云ふと、私はお暇させていただきます。お茶、美味しかつたです」

高野がすっと立ち上がり、深々と頭を下げた。

「毎二になりますが、ご迷惑をおかけして誠に申し訳ございませんでした。そして今度とも、どうぞよろしくお願ひ申し上げます」

「どうぞ、わざわざお越しにただいて感謝しております。今後とも、弟共々よろしくお願ひします」

俺は姉の声に会わせて、頭を下げた。

ふつ。

高野のおかげですべてうまく行つた。これにて一件落着だ。

……なんて幻想は、すぐに打ち碎かれることになる。

「それでは、失礼します」

ばたんと扉が閉じ、玄関先から高野の姿が消えたとき、姉が無機質な声で、こう言い放つたのだ。

「 さて、本当のこと教えてもらいましょうか」

隠し事はすぐばれる

俺は姉の部屋で土下座をしていた。冷ややかなフローリングに額を付けて、謝罪の意を体で表現しているのだ。

『めんなさいの究極形態 それが日本に古来より伝わる『DO GENZA』というスタイルだ。

どうだ、みつともないだろ。360。のどの角度から見ても、みつともないだろ。

しかし、これでいいのだ。みつともなくとも、姉の怒りの鉄拳を食らひつよつは遙かにマシだ。

「 下校の途中、中瀬古くんに会つたわ。彼、私に会つなりなんて言つたと思つ? 」

姉の声が頭上から降り注いでいた。その声は怒りに満ちていて、ときおり震える。

……とてもじゃないが、面を上げられない。

もし姉のツラを押んだら、俺は恐怖のあまり、「下は洪水、土砂災害、これなーんだ?」状態になってしまつ。

ちなみに、「下は洪水、土砂災害、これなーんだ?」の正解は失禁である。スカトロ流星群だと大正解。おわかりかな。

それはさておき。

せめてもの願いとして、これ以上みつともない姿は晒したくないのだ。土下座でお漏らし これは何式の便器なら対応できるのか。未来の科学者たちに期待したい。

「必死な顔で駆け寄ってきて、『弟さんは生きますか?』 だつて。一瞬、耳を疑つたわ」

「……すみません」

俺は相槌の代わりに謝罪の言葉を告げる。しかし、姉の小言はどうまるところを知らない。

「もつと話を聞けば何よ。彼は、さつきの女に思いきり蹴飛ばされたらしいじゃない。どうしてあんたは、そんな危険人物を我が家に招き入れてんのよ」

「……すみません」

「このとき、訊かれもしないのにわざわざ言こと訳を重ねる という行為は火に油を注ぐようなものだ。ただひたすら機械のように「すみません」をリピートすることに徹するのが、経験上もつとも早く相手の怒りを鎮める怒られ方だ。マジだよ。

「あの女の拳、見た? あれは、人を殴る訓練をしている武闘家の手よ。まず間違いなく有段者かそれと同様の実力者ね。手合せしなくともわかるわ、あの女は私よりもかなり強い」

「……すみません」

合氣道の有段者（五歳のころからやつてこむ）であるといひの姉が言つのだから、高野は相当強いのだろ。

それにしても、高野は姉よりも強いのか。 そりが、そりなのか。

……なんて身分が低いんだ、俺は。 情けなくて涙が出てこなくなる。
ガ。ハ。ハ。ハ。

「ところで、高明？」

「はい？」

俺は思わず素つ頓狂な返事をしてしまつた。 それもそのはず、姉がこきなり俺を名前で呼んだからだ。

高明　　だなんて、ここ数年、姉の口から発せられたことは一度もなかつたんじゃないかな。

今日はいつたい何が起つてるんだ！　いや、いつたい何が起るんだ！？

「わらわと顔を上げなさい

「……すみません」

俺は仰せのままに従つた。

田の前には、姉がいる。 依然として、彼女の全身からは邪悪な鬪氣が湯気のよつて湧き出でてゐる。 よつて見える。

そんな姉は上品に微笑んで、

「何か隠し事をしてこるでしょ？ やりやう本当に」とを言つた
れい

と本題を切り出した。

「それと、一つだけ忠告しておくわ。私の質問には正直に答へなさい。さもないと、どうなるか……わかるよな？」

「……はい」

答える数瞬前に、俺は腹を括つた。もはやどこも逃げ道はない。いつなつたら真正面から立ち向かつままだ。

……怖いけど。

「よろしい。じゃあまず最初の質問。昨晚、帰りが遅れた事情を説明しなかったのは、なぜ？」

姉は真つ直ぐに俺を見ながら言つた。

「あの女の言ったことが本当なら、『いやー、酔っぱらいの女に絡まれて遅くなつたんだよ』とか説明すればよかつたじゃない。なのに、高明はそうしなかった。これには何か裏があると思つんだけど、どうなのかしら？」

「……裏と云ひ大げさなものではないけど、あえて隠していた部分は、ある」

「何それ？」

「あのわ……言ひのが、恥ずかしかつたんだよ」

俺は顔から火が出るよつた羞恥心を抑えながら言つた。

「高野先生が怖くて……泣いてしまつたんだ」

「はあ？」

姉は皿と口を大きく開けた。俺の言つてることが理解できていない」と様子だ。くそう、これ以上喋るのは恥ずかしいぜ！

「……えつと、その、中瀬古が蹴り飛ばされたのは知つてゐだろ？」

「うん。本人から聞いたからね」

「あいつがぶつ飛ばされて、びびつた俺は、動けなくなつて」

「泣いたの？ もしかして、それが 帰りが遅くなつた原因？」

俺は無言でうなずいた。

「それで 女に泣かされたのが恥ずかしくて、私たちに事情を説明しなかつたの？」

俺はもう一度、うなずいた。

すると、姉は身体を仰け反らせながら、

大きな笑い声をぶち上げた。

「何それ小学生かよ！ くだらないわ！ あはははははははっ！」

111

ちくしょ。だから言つたくなかったんだ。

もし昨夜、正直に事情を説明していくても、

『女に泣かされるなんて、あんた本当に中学生？！ これだから毛も生えていないホワイトチンチン、世にも珍しいツチノ「野郎は』みたいなことを言われていたはずだ。さらに、両親からの糞みの視線も加わっていただろう。

「ひつじの山で遭つんだ、俺は。二つも二つも。」

「わかつたわ。理由がバカすぎて腑に落ちないけど。ふくくつ」

姉は目の端を拭つてゐる。

「まあ面白かったから、今度はおこりあがむわ」

「…………うん」

昨夜の件については、これで決着がついたようだ。

姉の逆鱗に触れなかつたのは、奇跡としか言いようがないけど……ともかく助かつた。これにて最大の地雷原は通り過ぎたはず。

まだ最後までわからぬいけど。

「じゃあ、次の質問よ」

姉は「ほんと咳をした。」

「わざわざあの女が、部活がひとつとか言っていたナビ、それほどのことかじり？ 高野さん、部活とは別に『やめさせられたい』があるわよね？」

フノベルト

「……漫画の手伝いのことは？」

「そうよ、わかつてゐるじゃない。けれどあの女が部活への参加を催促したとき、高明はどんな返答をした？」

「えっと、あれは、その場しのぎとこいつか……」

たしかに、そうだ。何の考へもなく、「うん」と答へてしまつた。

でも

「本意じゃなかつたんだ。話の流れで、なんとなく答えただけだよ」

「本当かしら？」

姉の皿つきが鋭くなる。

「本皿は……漫画の手伝いがしたくないから、部活に参加するといつ皿を作るために、あの女を呼んだんじゃないの？」

「いや、違うよ。」

俺は即座に否定した。姉の推測は間違っている。別に自分から進んで漫画の手伝いをしたいわけじゃないが、姉には早く夢をつかんでほしいんだ。

これは神に誓つて、本気でそう思つている。

「……そ、そう。そんな大きな声を出さなくていいじゃないのよ」珍しく姉がうろたえていた。俺も、自分が怒つていいことに内心驚いていた。

それにしても。

なるほど、姉が引つかつていた部分、俺に本当のことを訊き出したかった部分は、それか。

でも、それだけは言わないでほしかったな。すいぶん悲しかった。俺が今までやつてきたことを全部否定されたよつた気がしたから。

「わかったわ。でも一応これも確認のために聞いておくけど、別に部活をやりたくてあの女の呼んだわけじゃないのよね？」

「うん。部活は、今となつてはどうでもいい。」

半年前ならともかく、今は心底どうでもいいのだ。目的は見失つた。陸上競技を続ける理由は、どこにもない。

「了解。それじゃあ最後の質問ね」

姉の口調がよりシリアスになつた。

「さつひと終わらせるために単刀直入に訊くわ。高明、あの女に惚れたらんじ」「ありえない」

姉が言い終えるよりも早く答えてやつた。このときの反射神経は世界トップクラスの域に達していたと思つ。

なぜなら俺は生糸の年下好きだからだ。未来永劫、年上の女性に惚れることなんかない。

これは決定事項だ。誰が何と言おうと、俺はこの意思を捻じ曲げるつもりはない。断じてだ。

「……………やつ。わかつた」

姉は目を閉じて何かを考えるようにして、うなずいた。そして、続けざま、

「全部の質問に答えてくれてありがとね」

そう言つて、輝かんばかりの笑みを浮かべた。肉親でありながら、その笑顔は魅力的に思えた。

「あつ、わつだ」

姉は突然、ぱんと手を叩いた。

「正直に答えてくれた」ほづびとじて、門限を廃すよう、お父さんとお母さんを説得してあげるわ」

「……え？ 本当に？」

「本当に？」

マジか！ 姉の言ひことなら全部聞くからな、ひさの両親は。

いやー、しきしまあよかつたよ、門限が戻つて。それに、姉からの疑いも晴れたし。

最後にこんな結末を迎えるとはね。これはいややは結果オーライとこつやつだ。

オールオッケー。よきかな、よきかな。これでよつやく一件落着だな。わつはつはつはー

なんて、思つてこらが俺にもあつたのを。

実は、

「高明。それともつーつ、ほづびがあるのよ

！」からが真の恐怖の始まりであることを、

「金輪際、あの女と関わることを止ませてあげるわ。いいわね？」

「のときの俺は、知らなかつたのである。

作戦名「ひびき」

あれ以来、高野から逃げる生活が続いた。

といつのも、姉が言った、あのセリフ

「金輪際、あの女と関わることを止めさせてあげるわ

あえて言つまでもないが、あのセリフは褒美ではなく、俺に対する命令である。

金輪際、高野には関わるなど。

つまりはそういうことだ。

無論、俺に拒否権はない。何も語りはず、感情を殺して、その命に従つまでだ。それが、姉弟の間における絶対のルール。たとえ天地がひつくり返るつとも、それを破ることは許されない。

そして。

命を受けた、翌日。逃亡生活、初日。やつやく第一の試練が訪れた。

朝一番、廊下で高野とHンカウンント。

「よお……ほん。おおよう、九条くん」

高野は周囲の田舎にしてか、不自然におじやかな口調で言った

た。

「おせよハハヤハササ」

「えっと、昨日は」 「昨日はお世話をになりました。今から懲戒の用があるので、失礼いたします」

「おっ……はい。頑張ってね」

俺は努めて自然に言葉を返し、戸惑いの表情を浮かべる高野を置いて、足早に教室に向かった。

これにて、任務遂行。

たとえば、教室を移動中。

「あっ、九条。昨日は」 「おっとー 黒い魔魔 もとい、ウノコがすぐそこまで迫ってきてるので、失礼しますー」

あるいは、職員室で。

「九条くん。昨日は」 「おっヒー。腸内でぶいぶい言わせてる、ブラックギヤングたちを、トイレでぼほほこにしてくるので、失礼しますー」

あるいは、呼び出しを食らつても。

『三年二組の九条高明くん。至急、職員室まで』 「おっヒー

ウンコとの激しい口論で、俺は何も聞こえない！ じり、てめえ！
ブリブリブリブリ「うせえんだよ！」

あるいは、校門で。

「おい、九条！ 昨日は」「おっとー 水虫がかゆさるので、
ダッシュで帰ります！ もよひなー！」

振り返つてみると……我ながらこれは酷い。

やけにウンコの足跡が田立つ。たまに水虫に浮氣したりもするけれど、ウンコとのこねやつ毛具合が尋常ではない。

『九条 w.i.t.t.u nコ』

あえて言うなれば、肩を寄せ合つてプリクラ取つてるレベル。そして、それを互いの筆箱に張り合つてる感じ。

だが、しかし！ 考えてもみてほしい。

先生の呼び止めを断るに足る理由が、ウンコ（生理現象）以外にあり得るだろうか？

小便？ 小便でもいいが、それは何度も使えないからダメだろ？。水虫と同じ、浮氣相手に過ぎない。

腹痛？ そんな女々しい言い訳なんざ、漢の中の漢である九条高明には使えない。だって、腹痛イコールウンコじゃないか。「腹痛と言えば？」という連想ゲームをさせれば、十人中十人が「ウンコ」と回答するだろ？。だから堂々と胸を張つて、「ウンコ」と言えれば

いいのだ。他人に恥じらじを感じさせてしまつようない台詞は、口が裂けても言葉にできない。

もう、どじのつまり、ウンコ以外はあり得ないのだ。今の俺にはウンコ以外に考えられない！

とは言つても、その言ひ訳も毎日は続けられない。当たり前の話だが、一田、三田となれば、さすがに高野でも、いよいよ氣づくだらう。

『九条は、お腹の調子が悪いんじやなくて、頭の具合が悪いんじやないか？』と。

そう思われるのは、誠に不本意だ。

しかし、だからと言つて、他に言い訳の代案があるわけでもないし、諦めて高野と会話を交わすのはもつと不本意だ。場合によっては、俺は姉用のサンドバッグとなるだらう。

まあ、俺と高野が関わっていることが姉本人にバレなきや済む話なのだが、いつどこで誰が俺たちの姿を見ていて、姉にチクるとも限らない。中瀬古の例もあるしな。油断は禁物だ。

そうして逃亡生活も三日が過ぎた。

もうそろそろ、ウンコとのペソードが尽きかけた頃合だ。

考え事をしながら廊下を歩いていると、あの男が現れた。

あの男、現る

「よお、九条！　へイへイ元氣かい？　ヒューー！」

妙な決めポーズと共に、あの男 中瀬古が現れた。ついでに両指を鳴らしながら。パツチン、パツチン……と、人の氣に障る音を奏でて。

「オイオイ、そんなしかめつ面、らしくねえぞ！　ジョウクちゃんよお！　ヒューー！」

「お前……ひとりアヘン戦争でも始めたのか？」

テンショングが異常すぎる。こんなハイな中瀬古を見たのは、何年ぶりだろ？ それにしたって、いつにもまして気持ちが悪い。

「おいおい冗談きついぜ！　お前は『バラバラ』ってなダンスを知らんのか？　ヒューー！」

「……知ってるよ。名探偵少年が、アニメのエンディングで踊つてるやつだろ？」

言いながら思い出した。なるほど、さつきの決めポーズは名探偵少年のあれか。

「にしても、なんでそんなにテンショングが高いんだ？」

「テテ、テテテテ、テンショング！？　いつも通りだろ？　通常運行、出発進行つてなもんよ？　ンン？」

……アザレ。

「中瀬古。あのさ、こきなりなんだが、一つだけお願にしていいか？」

「おつめー。マーンとあせががれマーンー。ヒューー。」

「頼むから理科室に置いてある薬品、全部イッキしてくれないか？ わのテンションならイケるだろ？」

「そいつは無理なじ相談だね、ベイベー。そんなことしちゃ、マイハニーに怒られちやうぜ！ フウーー。」

「……あん？ マイハニーだと？」

俺は中瀬古の言葉に違和感を覚えた（まあ、すべての言葉が違和感だらけなわけだが）。と同時に、「マイハニー」とこう文言から、ある推理を導く。

この異常なまでのテンションの圖。

イカれた言動。

「ナン=新ー。」

……もしや！ ……それか！

「お前……彼女ができたとか……そういうことでもあったのか？」

「よくぞ聞いてくれた。さすがは九条。俺の幼馴染だ」

言いつつ、中瀬古は馴れ馴れしく俺の肩に手をまわして、体を寄せてくる。口調が戻ったのはいいが、今度は別の意味で気持ちが悪い。

「ときに 九条よ」

中瀬古は耳元でささやく。

「高野先生がウチのクラスの副担任だといふことは、お前も知ってるよな?」

「ああ。それがどうかしたのか?」

「なら、あの人気が、前に俺とお前がケンカしてたときに現れた女性だということも、知ってるよな?」

「……ああ。だから何なんだ? サッサと本題を言え」

まどろっこしい。

「俺はなあ、九条……」

中瀬古はズボンのポケットに両手を入れて、天を見上げた。

「恋をしちまつたんだ」

「誰に?」

「高野先生に恋をしたんだ」

ためらひなく中瀬古は言った。不覚にも、男らしさをやつだな
と俺は思った。

「禁断の恋だが、あの人ホレちまつたのさ」

「……お前の心臓、早送りさせる機能とかないのか?」

「ねーよ。強制的に早死にさせよ!とすんな」

中瀬古の心臓を、自由自在に操れるリモコンがあればいいのに。

極めて気持ちが悪いから、できるだけ早く（苦じむことはスロ
ーにして）死んでほしい。

「しかし……どうでもいいけど、どうがいいんだ? あんな年増で
怖い女の」

「強くて美人でカッコイイ」

まあ、それはわからんともないが。強さと美人を兼ね備えてい
るのは、同意だ。

「けど……お前、出会いがしらにいきなり暴行されてたじやねーか。
あんなムチャクチャなことされて、それでもホレたってのか?」

「はああああああああああああー!?」

俺の顔を下から覗き込むようにして、中瀬古は吠えた。

「美人の足蹴りなんか、一生に一度あるかないかのレイイベントだぞ？ しかも、女教師だぞ？ ッツ気満載美女女教師のヒール回し蹴り（黒ストッキング）だぞ？ これ以上ないレベルのオプション付きだぞ？ 実はあの夜、俺は自らに訪れた幸運を噛みしめて咽び泣いたんだぞ？」

「お前の心臓、停止する機能とかないの？」

「あるけど、死ぬわ」

「ほんの三日、一時停止するだけだから」

「やめろ。てか、なんでそんなに俺を早死にさせよ？ とかある？」

「そんなの言つまでもねえよ」

俺の気分を害す存在だからだ。

「いや、まあ……九条の言つことも一理ある。あの夜は、たしかに俺も怖いと思った。正直、チビったしな。栄養ドリンク一本分くらいは漏らした」

「お前もか」

ちなみに栄養ドリンクの容量は100mlくらい。

「でもな。昨日、一人つきりで会話をしてみて、気づいたんだ。この人は、俺にとつての……運命の人だと」

「お前、言葉選びが絶妙に気持ち悪いな。運命とか、恋とか、ハーネーとか」

「すべてのプロ作詞家に謝れ！」

「……いや、お前、なんで作詞家の端くれみたいな顔してんの？」

プロの彼らとお前を同格にするのは失礼だし、お前がすべての作詞家に謝れ。昨日、作詞を始めたやつにも謝れ。

「九条、許せ。俺はこういう経験は初めてだからな。今はまだ自分の気持ちを言い表すための上手い言葉が思いつかねえ。でも、これから経験を通じて、たくさん覚えていくんだろうな……」

「黙れ五流ボーカマー。デビューすることなく、引退しろ」

「ああ。高野先生と結婚したらな

……まつたぐ。

本当に壯き気を催しちゃうだ。どうも、『中瀬古と恋バナ』という組み合せが最悪すぎるみたいだ。混ぜるな危険。未知なる化学反応が起きやうだ。

「これ以上、気持ち悪いこと言つて、またアキレス伸ばすぞっ。」

「構わねえ。俺は真剣なんだ。いつかあの人に結婚を前提としたお付き合いを申し込む。OKをもらつまでも俺は諦めん」

中瀬古の声色は、まさしく言葉の通りだった。

「そして九条。突然だが、お前に頼みがある。マジの頼みだ」

「……なんだよ」

訊ねると、中瀬古の田つきが鋭くなつた。

「俺が高野先生を付きましたために、色々と協力してほしい」

「この男の田つきは 本氣だ。

「本氣で、アヘンを常習している男の田だな」

「だからしてねーよ！ てか、アヘンで例えるのやめやー。俺の悪評が広まるだろー。」

「何を今や。大々的に不良やつって、悪評を気にするとかどんな小物だよ。」

まあ、実際に小物だけど。アクセサリーとかじゃなく、女子に嫌われる方の小物だけだ。

「だつてお前、不平等条約結ぼつとするじゃねーか」

「こちいちアヘン戦争に絡めんなー。」

いやだつて、お前の頭がおかしいんだもの。一連の言動を観察してみると、どう考へても正気じやないだる。まあ、恋煩いの最中に正気なれないのは、ある意味では正常なんだけだ。

しかし、ここでの場合は極端すぎる。だから、気持ちが悪いのだ。

「協力つつても、そんな大したことじゃねえ。だから、まずは用件だけでも聞いてほしいんだ。なんなら見返りも用意する」

中瀬古は、両手を合わせて拝むよじこぼつた。

……見返りなあ。期待でわざわざこなこにこなこ、腐れ縁のよしみだ

「わかった。聞いてやるよ」

「じゃあ、聞かせよ」

中瀬古は俺の両肩をつかんで、じつじつと

「お前、高野先生を避けてるだろ？ その理由を教えてくれ

トラブルメーカー

中瀬古の「希望通り、俺は一連の事情を説明した。中瀬古が姉に余計な情報を『えたせいで、いつになつてしまつたことを強調して。

「なるほど」

中瀬古は顔中に汗をかきながら、ひとつ、うなずいた。

「高野先生は『私のせいかもしない』って言つてたけど、諸悪の根源は完璧に……俺だな」

「だろ？ もつと言えば、高野と出会つかけ、俺とお前のケンカの発端、マキちゃんのアイスを落としたのも、すべてお前が原因だ」

神がかり的なトラブルメーカーだ。神と言つても、貧乏のやつな。

「さすがは富山中学で一番の不良。最凶。最悪。動くトラブル名産地」

「……お、おー… やめろ… やめてくれ…」

中瀬古は両耳を手で押さえて、頭を左右に振り始める。

「ただ生きているだけで他人に迷惑をかける才能だけは認めてやるぜ、中瀬古」

「……やべえ、お前の悪口によつて、心臓の鼓動が早まつてゐる…

「……………」

今度は、学生服の左胸の部分をつかみながら、「……………」と苦しんでこる。

「まあまあ。リモコンなしで死期が早まつていやがな。

「…………いや、でもなー。お前の姉をとど謫るまでは、その事情を知らなかつたんだし、俺に非はないー。けど、懲このはやつぱり俺だー。」

「そつ。お前は一刻も早く心臓を停止すべき。全身全靈を以て苦しみ抜いてから生命活動を終えるべき。やっぱり理科室のすべての薬品を……」

「飲まねえぞ」

…………ひつ。好機だと思つたのに。

「しかし、どうしたらこうんだ……」

中瀬古は腕を組んで険しい顔になつた。

「高野先生に『俺なら楽勝で九条を説得できますよー』と言つてしまつた手前、どうにかして、その問題を解決しねえとな」

「まずは今後、お前が姉さんに情報をリークする」ことを止め。姉さんとは関わるな」

「それは…………わかつた。けど、俺以外にも、お前の姉さんと繋がつ

てるやつがこの学校にいるだろ？ そいつら全員に口止めしねえと、お前は高野先生と会話できねえよな

そう。それが大問題なのだ。

携帯電話を所有している姉が、同じく携帯電話を所有しているこの学校の関係者に頼めば、俺と高野の動向を監視してもらうことはたやすい。この学校で、姉と繋がっている人間の顔は、俺が知っているだけでも十人以上はいる。

俺とは違つて、やけに顔が広いからな、姉さんは。多分、俺より知り合いが多いはずだ。在校生でもないのに。

「まあ、実際問題、口止めなんかできっこねえよな。九条も俺も、女友達なんてほとんどないし」

「できたとしても、リスクがでかい。口止めしてた事実が姉さんにバレたらもつとヤバいことになるからな」

「だとすると、やっぱりお前の姉さんを説得するしかないんじゃないか？」

「説得できたらもうやつてるわ」

姉に真っ向から口論を挑んで、俺が勝てるわけがない。

「だから中瀬古、姉さんを説得するならお前がやれよ

「そいつは……無理に決まってるだろ。お前の姉さんは、俺じやあ手に負えない」

中瀬古は 身内以外で姉の本性を知つてゐる「く」少數派の人間だ。ほら、じこいつたら昔からトラブルメイカーだからな。とんでもない目に遭つてるんだよ。

「……ひょっとしたら、だけどさ」

中瀬古は苦い顔をして言つた。

「お前が本氣を出せば、説得できるんじゃないのか？ 嘘は、ほら

「「んなもん、できるか」

俺は中瀬古の言葉を遮つた。昔のことはどうでもいいんだ。過去の恥ずかしい思い出を掘り起こすんじゃねえよ。

「まあ、たしかに……中学生にもなつて『アレ』をやられたら、ちすがの俺も引くわ

「……しまつともだが、うるせえよ」

アレがキモいのは、自分がいちばんよくわかつてゐるんだ。もしタイミングマシーンがあつたら、あの頃の俺を、後ろから鈍器で殴りたいと思つてこらへり。

「でも、このまま高野先生を避け続けるのか？ 彼女を傷付けるのを、俺は黙つて見過すことはできねえぞ」

「そんなの知つたこいつちやねえよ。大体、諸悪の根源は自分なんだつて、さつき認めてたじやねえか。高野には悪いが……この件については、俺のプライドを最優先にする。最終手段は、絶対に使わな

い

アレは、俺のプライドを著しく傷つけた。同時に、アリタ（アリタ）
心的外傷（が）が再び開いてしまつ。

「…………わかったよ」

「…………ながら、中瀬古（なかせこ）は不承不承（ふしようふしよう）といつまうな表情を浮かべた。

「ただ…………」高野先生（たかのせんせい）に云えて、「このことは、高野（たかの）

には云えるな

俺は中瀬古の顔を真正面（まじめん）から睨（の）んだ。

「高野（たかの）が関わって、これ以上、話がこじれるのは面倒（めんどう）だ。

年上の女（めのめ）と関わるのも、まづい（まづい）だ。せつてられない。

「もし云えたら…………お前のアキレス（アキレス）がどうなるか、わかるよな？」

キーン（キーン）カーン（カーン）。

釘（くぎ）を刺したところ（ところ）で、タイミング（タイミング）よく授業（じゅぎょう）開始（かいし）のチャイム（チャイム）が鳴（な）つた。

「じゃあ

俺は中瀬古の返事を訊かずに話を切り上げ、教室（じょうしつ）へと向かった。

小さな安息みーつけた

学校では高野から逃げ続ける日々を過ごし、一方で、自宅では姉の漫画の手伝いに追われる日々を過ごしている。休まる暇がないとは、まさに今、この瞬間のことを指すのではないだろうか。

一応これでも今年からは受験生の端くれになつたのだが、勉強に集中できる時間は一向に取れていらない。授業中も、連日の徹夜で消耗した睡眠時間を確保するべく、机に突っ伏して安眠している。おかげで、各教科の先生からは、腐ったみかんに向けるようなまなざしをちようだいすることしきりである。

元より真面目に勉強をするタイプではないが、将来のために備えておくことの重要性は、アリとキリギリスの童話によって十分に教育されている身だ。このままの状態で受験をすれば、まず間違いなく惨憺たる結果が出ることは想像に難くない。小学生でもわかる話だ。

俺は、自分の将来が不安だ。

不安はストレスを生み出す。同じく睡眠不足もストレスを生み出す。

ストレスから逃れるために、現実から逃避する」と、結局、祖先の問題は解決されず、それがさらなる不安の要素となり、ストレスが生まれる。

俺はこれを『ストレスの悪循環』と呼んでいる。

昔、親父からよく聞かされた話だ。

「問題から逃げるな、立ち向かえ。自分で精一杯やって、それでもダメなら人を頼れ。それでもダメなら、最後は俺が助けてやる」

なんて、やけにカッコイイことも言つてたな。

しかし、そんな威儀のある親父ですが、姉に対しては無力なのである。

ある日、俺は見てしまったのだ。

親父が年頃の娘に反抗されて、「女の問題は、どうもならん。難しい」と母に向かって弱音を吐いていたところを。

だから俺が、親父に「姉さんが無理やり俺を漫画のアシスタントにしようとするんだ」と打ち明けようにも、それは文字通り無理な相談というわけだ。いくら頼つても、助けてもらえない。

かくして俺は、ストレスの悪循環にはまってしまっている。それは、決して自力では（他力を使っても）抜け出すことはできず、姉が漫画家としてデビューするまで終わらないだろう。願わくば、今週の選考を通過して欲しいものだが、素人目から見ても、それは難しいように思えた。

今は耐え忍ぶ時期だ。研鑽を重ね、まだまだ粗削りな画力を高めていくことに専念すべきだ。

とこうよつた感じで。

「……頭を働かせ、田の心境と姉の漫画を分析していく、ある田の授業中。」

その授業も残り数分となつたところで、俺は睡魔に負けてしまって、無意識の世界へと旅立つた。

「最近ずっと寝てるよね」

田井のあきれたような声によつて起こされた。周りの声がつるといので、今はあつと休み時間だ。俺は机に突つ伏しながら答えた。

「いや、実は後ろの女子のパンツを覗いてるんだよ」

「ああ？ 角度的に無理でしょ」

急な下ネタにも全然引かずに立ち向かつてくる田井は……空気が読めねえやつだなと思う。悪いが今だけは、俺のことを気持ち悪がつて、どこかに行ってほしい。誰の妨害も受けず、ずっと眠つていいんだ。

「念のため念夢でパンツを見るところを境地を開拓しようとしてるんだよ」

「悪夢は見たくない」

「……ちなみに、今日の私のパンツの色は？」

「永眠をあげようか？」

「田井は明るい声で言つた。けど、たぶん顔は怒つてゐるはずだ。こ

のまま怒って、ビルにに行ってくれ。頼むから。

「岷やうなと」「あらめんね。でも、ひとつだけ質問してもいい?」

「…………おひ」

田井らしからぬ優しげな声が聞こえたので、思わず返事が遅れてしまつた。

「今週の田羅日、陸上の記録会があるんだけど、アンタは出場する?」

「バスで」

今度は即答した。そもそも出場するつもりはなかつたが、その日はあいにく漫画の応募締切日なのだ。

「…………そつか。わかつた」

田井は「これまた田井らしからぬ慈悲深さを感じさせる語調で言つた。

「アンタが何やってんのかわかんないけど、暇になつたら陸上部にも顔出しなさいよ」

「…………ああ。幽霊部員が突然化けて出て、みんなを驚かせてやるよ」

「今の顔色の悪いアンタが『とリアルすぎて怖いんだけど……まあ、無理せずに頑張んなさいね』

ぱしんと背中を強く叩かれた後、田井が離れていく足音が聞こえた。

……空気が読めないやつめ、と思つたのは改めるしかない。

いつの間にやら、ずいぶんと気の利く女性になつたんだな。

陸上部主将とこう立場が田井を成長させたのか。あるいは、それ以外の要因によるものなのか。わからないが、ともかく、俺をちょっぴり元気にさせてくれてありがとう。

などとは、面と向かつては絶対言えないし、心の中で囁くのもどうか恥ずかしいので、何も思わないでおく。

俺はただ、安らかに眠るだけだ。

そう。ストレスに弱く、長時間泣き叫ぶ赤ちゃんのよう、ひたすらに眠るだけだ。

臼井の思いやりに触れて温かな気持ちを抱いてもなお、それを一瞬で消し去るほど のストレスが、次から次へと生み出されてしまう。

それがストレスの悪循環にはまつた俺の現状だ。

ストレスの主な原因は、土日連続での徹夜による睡眠不足。また、漫画のしめきりに追われて いる緊張感が、俺の脆弱な心を刺激していた。

週明けの月曜日。

俺はとうとう一睡もせずに、おぼつかない足取りで登校した。椅子に座るや、さながら失神ＫＯの「」とく眠りについてしまった。

授業中、数学教師の栗山武に無理やり起こされ、だらけた態度を注意された。いつもならすぐに自分の非を認め、平謝りでその場を切り抜ける俺だが、その口に限ってはイライラを抑えることができなかつた。

「人が眠っているときに……いちいちうるせえな

「な、なにー?」

「……てめえの数学の授業は、数式との闘いじゃなくて、眠気との闘いなんだよ。不眠症のカウンセラーに転職しろよ」

ぱりりと本音をこぼしてやると、栗山は顔を真っ赤にして俺の胸

倉を掴んだ。

「お前、もうじつぺんぱしてみろおおおおおおおつー。」

栗山の絶叫が教室中に響き渡ると、今度は女子たちの悲鳴が上がった。その次の瞬間、机と椅子のガタガタと移動する音が一斉に鳴り、周囲は騒然となる。

だが、俺は周りのことなんか気にしていなかつた。

「あん、聞こえねえのか?」

田の前の氣に食わないやつに暴言を吐くことしか、考へていなかつた。

「つまんねえ授業してんじゃねえよ。」の税金泥棒め

栗山の返事は、右の拳によつて繰り出され、俺の頬にぶち当たつた。ゆつくりとした動作の右パンチだったが、俺に避けるつもりはなかつた。

なぜ避けなかつたといつのは、『じぐじく簡単な話だ。暴力を受けふこと』とて、暴言を吐いた罪を軽減せらるためだ。

またそりこ、それが俺にとつて有利な状況になつたりもする。

当たり前の話だが、先に俺が暴言を吐いたからと言つて、栗山が俺を殴つてもしょうがないとはならない。理由が何であれ、教師の体罰は許されないからだ。

いや、違つた。許されるか許されないかは、俺の気持ち次第だ。

俺が許すと言えば、栗山は何らかのペナルティを受けなくて済むし。俺が許さないと言えば、栗山は何らかのペナルティを受ける。

つまり、一度殴られておけば、先生（支配者）と生徒（弱者）の立場は逆転する。

そう、それが俺の狙い。安眠の邪魔をした、栗山への罰。

「言わせておけば……元々、授業を聞く気もないクズのくせに！」

栗山は血走った眼球でこちらを睨みながら、怒鳴った。

……やれやれ。

元々、授業を聞く気がなかつたのは正解だが、よりにもよつて俺をクズ呼ばわりときたか。それこそ漫画に出てくるダメ教師しか言わないようなセリフを現実に聞くことになるとはな。

意外と面白いじゃん、この人。ようやく眠気が醒めたよ。

「どうしたんですか栗山先生！？」

出入り口の戸が勢いよく開かれ、体育教師の佐藤が飛び込んできた。

「……くそつー！」

佐藤の姿を見た栗山は、忌々しげな表情をして、俺の胸倉を掴んだ。

だ手を放した。

俺は頬をおさえるフリをして、口元を手で覆った。こやりとむがんだ口の形を見られないようにするため。。

そうして数学の授業は、六限目の途中にして、中止された。

そんな一悶着があつた後、俺は会議室に呼ばれ、栗山を含めた四人の教師と話し合つことになつた。そのときにはすでに、俺も栗山も冷静になつていたので、今さら口論するまでの事態にはいたらなかつた。

俺が淡々と状況を説明して、栗山の心のこもつていらない謝罪を聞いて終了。会議室から出る頃には、帰りのホームルームのあとにある掃除の時間になつていた。

「……やつやと帰るか」

呟いてから、教室を手指して廊下を歩いていくと、思わず顔をしかめてしまつよつた光景を手の先たりにした。

階段の踊り場で、高野と中瀬古が喋つていたのだ。

俺はとつたに踵を返して逃げよつとしたが、一歩いち歩に気づいた中瀬古がダッシュで追いかけてきた。

「おー！ 九条、待てよー！」

「ひっせえー！ ひっせぐんなー！」

望んでもいゝ鬼「ひー」が始まつた。あちらーちらで掃除をやつている人がいるので、彼らを避けながら走らなければならない。

誰かとぶつかるのは嫌なので、力をセーブしつつ足を動かす。

「おい、陸上部！ 待てよ！ お願いだから待つてください。」

早くも中瀬古の息遣いは荒くなつてきていた。

人気の少ないHリアに差し掛かつたところで、俺は一いつ瞬で加速して、中瀬古に格の違いを見せつけてやるしかとした。 そのとき、中瀬古が叫んだ。

「妹の、[写真] やるからー！」

「……な、に？」

無意識のうちに俺の足は止まつっていた。「妹の[写真] 」といつ声で止められた。

止まつりだぬを得なかつた。

なぜなら中瀬古の妹は 俺の嫁の第一候補者であり、彼女の[写真]とあらば、俺は臓器を売つてでも手に入れたい代物だからだ。

「……はははあ よつやく止まつたな」

肩を上下に動かして息を整えている中瀬古に向かつて、俺はさつそく言い放つた。

「さて、中瀬古。待つてやつたんだから、ひとつと[写真]をよ！」中

「……はあはあ……わかつた。……こんなこともあらうかと……用意しておいてよかつたぜ」

中瀬古は荒っぽい手つきで胸元から一枚の写真を取りだし、それを人差し指と中指で挟んで投げてきた。

受け取った写真には、たしかに、彼の妹 中瀬古菜月の姿が映されていた。今度は、俺が「はあはあ」する番だ。

小学五年生。黒髪のショート。整った顔立ち。透き通るような白い肌。小柄で細身の体格。性格がやや生意氣で、照れ屋なところも、ポイントが高い。近寄ると、ほのかに柑橘系の香りがする。ううな気がする。俺の目の前にいる男が兄貴であるという事実をえげつてできれば、彼女は俺にとつて超理想的な女の子になる。

余談になるが だから俺はいつも中瀬古の心臓のリモコンを探しているんだよ。実はね。

「写真はありがたくいただいたが……とにかく俺はいつまで待つてりやいいんだ？」

早く帰つて昨日投稿した漫画の反省会をしなきゃならない。ゆえに、こんなところが長々と拘束されるのはじめんだ。

「長々と待たせるつもりはねえが」

中瀬古はすうっと大きく息を吸つて、

「お前に聞いておきたいことがあるんだ

真剣な声色で言った。

中瀬古がマジな顔をしているときは大体口クな展開にならないんだが、非常に高価な写真をもらつた手前、その要求をあつさりと断ることはできない。

「わかつたよ

俺はしづしづ要求を呑んだ。

「でも、手短に頼むぞ。俺は忙しいからな」

「……忙しい、な」

中瀬古は含みのある口調で呴いて、「わかつた、手短に」と約束した。

「これはついたさ高野先生から聞いたんだけどさ。最近、いろんな教科の教師たちが、口をそろえてお前の授業態度について、グチつてゐみたいなんだよ。あいつは教師をナメてんのか、と

「まあ、授業中はずつと寝てるからな」

そりや怒つて然るべきだらつ。言われなくても、自覚してこる。

「それで高野先生がお前のことを心配してたんだ。家庭で何かあつたんじやねえかつて」

「…………

俺は何も言い返せなかつた。中瀬古の言つたことが図星だつたからだ。

「俺は正直お前のことなんかどうでもいいんだが、高野先生には協力しようと思つていい」

「……」苦労なこと

どうせ無駄な努力なのに と俺は心の中で呟いた。

「だからな、九条。お前を心配している高野先生に協力したいから。お前に確認を取つておく」

「それはさつき聞いたぞ。聞きたいことがあるんだろ？ お前、ボケてんのか？ さつさと本題に入れよ」

軽口を叩いてみるが、中瀬古の表情は依然として変化なし。それどいつもか、心なしかわつきよりも真剣みが増している。

中瀬古は重々しい口調で、じつ言い放つた。

「お前の抱えている事情を、高野先生に伝えていいか？」

「前にも言つたが、やめろ」

俺はきつぱり断つた。

「もしそれがきっかけで、高野が俺の問題に関わってきたら、それこそ大問題になる。姉さんの怖さはお前もわかつてただろ？」

「まあな」

中瀬古はうなずいた。

「でも、わかつてゐからこそ、」Jだけは言える。お前の姉さんに対抗できる人物は、俺の知り合いでは高野先生しかいない」

「姉さんに対抗できる人物は……高野しかいない？」

「ああ」

中瀬古は自信たっぷりの顔で、もう一度うなずいた。

「Jの間、俺は高野先生の真の強さを知つたんだよ」

「……お前が高野に蹴られて痛い目に遭つた日のことか？」

「いや、それじゃない。お前は知らないエピソードだ。俺と高野先生との二人だけの秘密だから詳細は言えないが、高野先生はとにかく強い。色んな意味で強い。口論も、ケンカもだ」

たしかに高野の実力は計り知れないものがある。言われてみれば、姉も高野の存在を脅威に感じていたしな。だからこそ、姉は「あの女と関わるな」と言つたのだろう。

「だからさ、九条。悪いことは言わねえ。お前の姉さんを説得したけりや、高野先生を頼れ。お前の抱えている問題を解決したけりや、高野先生を頼れ。逃げず、隠さず、すべて打ち明けちまえよ。あの人なら、お前の力になつてくれる」

実際に俺も助けられたんだ
みたいな、やけに気持ちのこもつた声で、中瀬古はそう言つた。

「…………」

俺は数秒、思案した。……なるほど、中瀬古の主張はわかった。

「まあ、そうだな」

だから俺は本音で答えてやる。

「きっとお前の提案は正しい。高野は姉さんに対抗できる。それは認めでやる」

「だつたら、伝えてもいい」「でもな

ぱあっと表情を輝かせた中瀬古を制止して、俺は答えを告げた。

「勝率のわからない勝負には賭けられない。失敗したときのリスクがでかすぎるからな」

それに と前置きして、俺は続けた。

「実際、高野は姉さんの説得に失敗している。失敗の原因はお前にあるものだが、その事実は誰にも覆せない」

俺にとつては、それがすべてだ。だから中瀬古の主張する成功例に、全幅の信頼を置くことはできない。

「俺が本当に信頼できるのは、俺が見てきたすべてだ。重要な場面では、自分の見てきたもので判断したいんだ」

言い切つて、俺は中瀬古の田を見据えた。これ以上、何も言つことはない。

「…………」

中瀬古は長い沈黙の後、「……そうか」と言つて、納得の意を示した
かと思つたら、

「……これだけ説得してイエスと答えないなら、強硬手段しかねえ
な。つーか、そもそも確認を取る必要なんてなかつたんだよな
とんでもないことを言い始めた。この数分間のやりとりを無駄に
することを示唆した内容だつた。

「な、何言つてんの、お前？」

中瀬古得意のつまんねえギャグなのかと思い、俺は訊ねる。

「あ？ 独り言だから気にすんな、お前には関係ねえ」と、中瀬古。

平然とした顔つきで答えた。

「いやいや関係ない」となじだら

あえて俺に聞こえるようにふざけたことを抜かしやがつて。もし
や、強烈なアキレス腱固めがご所望なのか？

「俺が誰に何を言おうが言つまうが、俺の勝手だ。誰にも制限され
るこたあねえ」

「……おこ、これ以上ふざけんなよ。中瀬古」

さすがに本氣でカチンときたので、俺は脅しの意を含めてこう言つた。

「もう一度痛い目に遭いたくなけりや、高野には言ひなよ

「……いこせ、やつてみろよ。もし痛い目に遭わされたら、すぐに
……いや あえて言わなくとも、俺の言わんとする事はわかる
よな?」

中瀬古は不敵な笑みを浮かべた。

「教師に殴られてこいつそり笑つてゐるよつな、お前ならな

「……くつー」

俺は歯噛みした。中瀬古の発言は想定外だった。不良の番長であるところの中瀬古だけは、自分のメンツを守るために、決して『正義の力』を借りることはないと思っていた。だから今まで、こいつよりも肉体的な力が強ければ、こいつには勝てると思っていた。

しかし、ここにきて形勢は逆転した。

「アキレス腱固めでもなんでもいいからやつてみろよー ケガした
らすぐさま警察に通報してやるぜ! 何なら思いつきり殴つてみて
もいいぜ! それこそお前の家族にばれたら大問題になるからなー!」

中瀬古は挑発を続けた。正論で俺を攻め立てた。そして、対中瀬古との戦いにおいて全戦全勝の俺を窮地に追い込んだ。

その結果

「……望むところだ」

俺は自棄になつた。何もできずに中瀬古に負けるのだけは嫌だつた。せめて

「俺の名を思い出したくなるまで、殴つてやるー」

そう叫んで、強く拳を握りしめた直後だつた。

「お前ら、またケンカしてんのか?ー」

それはまたしても不意のことで、背後から高野のハスキーな声が響いてきた。

振り向くと、荒く呼吸をする高野が、十メートルほど離れた場所に立つていた。

これは 多少の違ひはあるが、まるで高野と初めて出会つた場面を再現したかのようだつた。

俺は硬直しかけたが、あのときの「の舞を踏むつもりはなかつた。

「……つー」

自分の意志とは関係なく震え始める両足を制御し、

「あつー」

と高野が叫ぶ間もなく、俺はその場から全力で逃げ出した。
カバンを教室に置いたまま。

後先考えずに校舎を飛び出し、家に向かったのだった。

「 反省会は、いろんなところにしておいて」

昨日完成したばかりの原稿のコピーをクリアファイルに入れながら、姉は言った。

「次回作のネームは、明日から描くわ。いつも通り、私はひとりきりで作業をするから、あんたは自分の部屋で、設定資料とキャラクター原案に田を通しておくこと。私の監視の目がないからって決してサポートしないよ」

「うん。全力を頼りますよ」

部屋のいたるところに落ちてこないペットボトルや栄養ドリンクを拾い上げながら、俺は答えた。

今さら釘を刺されなくとも、サボるつもりは皆無だ。むしろ俺は、姉のサポートに並々ならぬ情熱を抱いてこるくらいなのだ。

「よいよ本格的に受験勉強を始めるためにも、姉には一刻も早く漫画家としての礎を築き、俺に代わるプロのアシスタントを雇えるようになつてほしい。もしそれが叶えば、俺は晴れて受験生となり、勉強に集中できる。」

田標は、そつだなあ。できれば夏休みまでには、その筋の関係者に認められるよう努力したい。

俺は、他ならぬ俺自身のために頑張るのみだ。姉も、他ならぬ姉

自身のために頑張ってほし。

心の底から、そう思ひ。

「さて、明日の打ち合わせも終わったし、ソリソリで終わらじましよつか。今日もお疲れさま」

姉は椅子から立ち上がり、「…………ん」と両腕を上に伸ばして上体を弓なりにそらした。

その刹那、姉のお腹が鳴った。まるで弱々しい子犬が鳴くような、とても情けなく、かわいらしい音だった。

「なんか小腹がすいたわね」

姉は服の上からお腹をさすつて、そう呟いた。

時計を見ると、十時を過ぎていた。六時に夕食を取つてから、もう四時間も経つ。腹が鳴つたりはしないが、俺の胃袋も若干の空腹を訴えてくる。

「お菓子のストックはまだあつたかしら？」

「前回買つてきたのが五日前だから、母さん全部食べられてるかも」

「たしかに。あの人は歩く駄菓子屋だもんね」

姉はやれやれと肩をすくめる。

「……のところ」無沙汰だつたけど、あんたに夜食を買つてきてもらおうかな。頼まれてくれる?」

「うん、わかった。注文の品は?」

「こつものアイスといつものスナック菓子を五個ずつね、あつ、そうそう。ちよい待ち

姉は思い出したように呟いて、金色の長い髪を払つた。

「最近あんたも色々と頑張つてるし、あれからあの女との妙な噂も聞かないから、今日は、あんたの好きなものをおごつてあげるわ」

「……っー。」

思わず俺は息をのんだ。

『あれからあの女との妙な噂も聞かないから』といつ一言に、ただならぬ違和感を覚えたからだ。

この発言から読み取れる情報はただ一つ。やはり姉は、誰かを通じて俺と高野の行動を監視していらっしゃることだ。

警戒しておいてよかつたと安堵すると同時に、例の中瀬古の提案に乗せられて高野とコンタクトを取つていたらと思い、背筋が凍りついた。

「それとね。今まで手伝ってくれたお礼と

狼狽を隠せない俺の心情を知つてか知らずか、姉はマイペースに

言葉を紡いでいく。

「これからもよろしくとこう意味も含めて、」れ

ピンク色の長財布から五千円札を抜き出して、それを俺に手渡した。

「お釣りもあんたのものよ。こつも、ありがとね」

とまあ、そんなこんなで。

姉の毒気のない笑顔に見送られ、俺はパシリの任務をまつとつすべく夜の田舎町へと赴いた。

足で地面をとらえて歩きながらも、足の裏がふわふわと浮ついたような感覚になつてゐる。夜はまだ冷える季節なのに、身体の芯があたたかい。

姉のパシリをやつていて、こんなに気分が高揚したことは今までになかった。この新感覚は、いわゆる下僕（ないしマゾ犬）と呼ばれるアブノーマルな人種の抱く感情……じゃないのか。勘違いであつてほしいが、ひょっとすると受け身耐性の変態性欲が俺の心の中で開花し始めているのかもしれない。

「いやいや、ねーよ」

自分で自分にツツ「ミミながら、田舎の「コンビニに向かう。

「それにしたつて、なあ」

俺はそう呟いて、自分の影に視線を落とす。

あれほど上機嫌な姉を見るのは、いつ振りだらうか。俺に容赦のない暴行を加えているときの姉は、それはそれはもう肉親の俺でさえ素敵に見えるほど良い笑顔をしているのだけれど、そういうシチュエーションではなく、ノーマルな場面における素の笑顔。

久しく見ていなかつた。俺が小学校低学年の頃には、いつでも見ることができたはずなのに。

「いつからだらうか。姉に脅えて暮らすようになつたのは。

「いらっしゃいませー」

「……うわー！」

俺は声を上げて、我に返つた。考え方をしていたせいで、コンビニの中に入っていることに気がつかなかつた。

視界の端で、男性店員が不思議そうにこちらを見ているが、気にしないでおこう。

俺は気恥ずかしさを隠すため、早足で店内を歩きまわり、スピード一に買い物を済ませた。

「あつがうりやれこましたー」

との声を間に受け、逃げるよひに店を出た。

すると、よつやく顔の火照りが収まる。

「……ふう」

一息ついて、再度歩き始めながら、物思いにふける。

次の考え方とは、さつきとは違つテープ。今日の田中のことだ。

田下、俺が懸念している人物は、中瀬古と高野である。今後、彼らの動向によつて、夏までに姉を漫画家デビューさせる計画が、台無しになる可能性がある。だから俺はどうにかして彼らの動きを封じたい。

でも、どうやって彼らの動きを封じればいいのか。

中瀬古は暴力によつて従わせることができなくなつたし、説得できる材料も見当たらない。高野はそもそも接触することすらかなわない。

『俺に関わらないでくれ』

彼らがその言葉を聞き入れてくれるだけで、すべて丸く收まる話なんだが、そう簡単に事が運ぶとも思えない。もつとも、これはあくまで俺の憶測に過ぎないが、中瀬古はすでに高野を説得しているはずだ。

『九条姉弟は、いつもああなんですよ。だから心配せずに放つておきましょう。関わるだけムダですよ』

みたいな感じで。これでも長年の付き合いになるしな。あいつは俺のことをよく知つてゐるし、俺もあいつのことはよく知つてゐる。

それに、あいつは今日の会話の最中、いつ言っていたからな。

『俺は正直お前のことなんかどうでもいいんだが、高野先生には協力しようと思つていい』

『の発言から察するに つまるところ、あいつは高野の説得に失敗したのだ。なぜ失敗したのか、なぜ高野が説得に心じなかつたのかは、当事者たちに聞かなきやわからないが。

ともかく。

いずれ高野と中瀬古の二人が何らかの形で、俺に『』してくるだろ。そしてその後、高野と接触していた事実が間違つても姉に知れたら 俺は終わりだ。

いやはや。前途は多難である。

どうしたもんかねーなどとあれこれ頭に考えをめぐらせながら歩いていたら時間はあつという間に過ぎた。ここから数メートル先の角を曲がれば、自宅に面した道路に出る。玄関に着くまで、あと一分もかからない。

「ん?」

自宅前にさしかかったところで、バイクにまたがる人のシルエットが見えた。全身黒ずくめで、頭にはヘルメットをしている。怪しさ満点の不審者だ。体格は細身で、身長は俺より低い。

俺は足を止めて、次のアクションについて思案した。

あえて不審者に接触してみるか。それとも不審者がここから立ち去るまで待つか。

安全なのは後者だが、いかにも怪しげな人物を、みすみす逃していいものだろうか。……否、だめだろう。文字通り、不安で夜も眠れなくなる。

だとすれば前者を選ぶしかないが、もし不審者が物騒な行動に出ることがあれば、肉弾戦になるのは避けられない。多少の危険が伴う。

バイクに乗っているということは、不審者は少なくとも十八歳以上の人間だが、見た目はそれほど強そうじゃない。きっと俺でも勝てる。

まあ最悪ケンカに負けたとしても、家の外が騒ぎになれば、姉が出てきて退治してくれるはず。あいにく両親は出張で、二人そろつて家にはいないが、姉がいれば十分だ。暴漢の一人や一人、合気道の達人の敵ではない。

しかしながら、不審者は俺の家を眺めて、一体何を企んでいるのだろうか。

まずはいきなりグーパンチで質問するようなことはせず、日本語を使ってその意図を問いただしてみるか。

俺は不審者に気づかれないよう警戒しつつ、背後から問合ひを詰めた。

「おい」「ツー

声をかけると、不審者は機敏な動きで、こちらを向いた。

「俺の家に何か用か?」

さりに、高圧的な口調で問いつてみる。わあ、びりばる。不審者を
んよお。

「…………」

長い沈黙の末、不審者はこもつた声で

「九条か」

俺の名を呼んだ。その声は、聞き覚えのある特徴的な女性の声だ
つた。

「…………ひ、ひょつとして、高野…………先生ですか?」

まさかの人物の登場に、俺がうろたえながら訊ねるや、不審者は
返事の代わりにヘルメットを外して、その顔を見せた。

「よつ、また来ちまつたぞ」

そう言つて、いたずら小僧のような笑みを浮かべた人物は　高
野だった。

「どうして…………」「…………?」

「……いや、えつと」

高野は照れたように頬を人差し指でかきながら、一いつのたまつた。

「中瀬古に止められたんだが、どうしてもお前と話がしたくてな」

「……ひー」

俺は一瞬で自分の顔が熱くなるのを感じた。心臓が跳ね上がり、今にも口から飛び出しそうな勢いだ。

「で、家の中にいるかと思つたら、いきなり背後から現れたからびつくりしたぞ……というか、顔が真っ赤になつてゐみたいだが大丈

「大丈夫です！」

俺は膽い氣味に答えて、高野の声を遮つた。指摘されたら余計に顔が熱くなる。何とか「まかさないと」

「て、てか、びっくりしたのは「ひらの台詞ですよ。全身真っ黒のライダーが、白毛の家の前に立つてゐるから、何事と思つて……あ

心境を吐露しつつ、ふと気づいた。俺は今、姉のいる白毛の真ん前で、高野と接触してしまつていい。この上なく最悪なシチュエーションじゃないか！

「今度は顔を青ざめて。一体どうしたんだ？」

言いながら、高野が首をかしげた そのときだつた。

「外で何やつてんの？ お密さんなら家に招き入れなさいよ……つ

て、えつ？」

声と同時に玄関が開き、姉がまばゆい光を背にして現れた。大きな田を真ん丸にして。

直後　目の前の世界が、まるでコマ送りのよじに進んだ。

「逃げるや」

高野のわざやせ声が聞こえた。爆発的なバイクのエンジン音が鳴り響いた。

「京子さんー」

高野が姉の名を叫んだ。俺の体が地面と平行になつた。高野の左腕で、お腹をがつちりとホールドされる形で。

「高明くんを、少しだけ借りますー！」

ブウンッ！　ブウンブンッ！　バイクを吹かす音が鳴るたび、コマ送りの世界が加速した。

かくして　俺は拉致された。

高野香奈といふ、型破りな新米教師の手によつて。

そして後に、この行動が、とんでもない騒動の引き金になるだなんて。

このときの俺が思いもしなかつた……のではなく、思いもしたくな

なかつたのはいつまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7849s/>

ばろり

2012年1月12日21時48分発行